

---

# 本日のスープ

式部雪花々

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

本日のスープ

### 【Nコード】

N7654F

### 【作者名】

式部雪花々

### 【あらすじ】

イブの夜、社内で“クール・ビューティー”と噂の高本千莉を街で見かけ、声を掛けた前園一夜。  
自分の行きつけの店に千莉を連れて行き、冷え切った体と心を一夜が温める。

12月24日。

“クリスマス・イブ”

恋人がいない者同士、会社の同僚達と

『クリスマス会』と称して飲んだ後、

外に出ると薄っすらと雪が積もっていた。

いつの間にか降り始めたようだ。

ホワイト・クリスマスか・・・。

真っ暗な夜空を見上げると

真っ白な雪が俺の火照った頬に落ちて

融けていった。

冷たい・・・。

けど、微酔い気味の俺にはその雪の冷たさが

少し心地良くも感じた。

しかし、外気の冷たさもすぐに伝わってきた。

「寒っ。」

思わず出た独り言。

マフラーをぐるぐると首に巻いて顔を上げると

目の前に大きなツリーが見えた。

そして、その下にさっきの俺と同じ様に空を見上げ、

落ちてくる雪を見つめている人がいた。

街は聖なる夜を共に過ごす恋人達でいっぱいだ。

その中でただ一人、ベンチに座ったまま

ただじつと雪を見つめている。

高本さん・・・？

その人は俺と同じ会社の総務部の女性・高本千莉だった。

いつも黙々と仕事をこなし、誰に対しても

淡々とした態度で接すると有名で、

社内行事や飲み会なんかには参加するらしいが

誰も彼女の笑った顔も、泣いている顔も、

怒った顔も見ることがない。

無表情で何を考えているかわからず、

プライベートも全て謎。

しかし、顔は美人系でモテないはずはなく、  
いろいろ誘われはするらしいが断っているとか。

まさに“クール・ビューティー”？

「高本さん。」

彼女の目の前に立ち、少し屈み込む様にして呼んでみた。

すると彼女はハツとしてすぐに視線を絡ませてきた。

「。。。。。」

黙ったまま俺を見つめている彼女。

あれ？

高本さんだよな？

「俺の事、わかんない？」

部署が違うからわかんないのかな？

「……経理の前園さん。」

「正解。」

一応、顔と名前は知ってるのか。

「何してるの？誰かと待ち合わせ？」

「いえ……。」

高本さんは俺の質問に小さく首を振って答えた。

待ち合わせじゃなきゃなんなんだ？

こんなところだ。

・・・てゆーか、いつからここにいるんだ？

高本さんの長い黒髪とベージュのコートが少し濡れていた。

地面に積もっている雪からして少なくとも

2時間くらいはここにいたみたいだ。

もうすでに11時近い。

9時・・・いや、もっと前からいたのかもしれない。

「冷たい。」

コートのポケットから右手を出して彼女の頬に触れると

まるで氷のようだった。

「ねえ、これから時間ある？」

「え？」

「この近くに俺の知り合いがやってる

スープ専門店があるんだけどさ、

そこ夜中までやってて、俺、今から

行くところなんだけど一緒に行くつよ。」

そこは俺がいつも飲んだ帰りや

こんな寒い日によく行く店だ。

「このままここにいたら、風邪ひくよ？

体、冷えてるみたいだし。

熱いスープでも食べて暖まろうつよ。」

俺がそう言っで軽く腕を引っ張ると

彼女は戸惑いながら立ち上がった。

「行くっ。」

彼女の手を握ると俺の体温が一気に

吸い取られていくような気がした。

冷凍マグロじゃないんだから・・・

ホントにいつからここにいたんだ？

知り合いのスープ専門店はツリーの場所から  
歩いて5分もかからないところにある。

一緒に歩いている間も俺は高本さんと手を繋いでいた。

最初は嫌がるかな？と思っていただけ

意外にもそのまま大人しくついて来ている。

「ちいーす。」

店の扉を開けて中に入ると

すぐに知り合いの顔が目に入った。

寺田賢、高校の時から親友・・・いや、悪友だ。

「いらっしゃい。」

お？珍しいな、おまえがここに

女の子連れてくるなんて、雨が降る。」

そいつは高本さんの姿を目にすると

ちよつと意地悪そうな顔をした。

「ばーか、雨どころか雪が降ってるよ。」

「え、マジで？」

「マジ。ところで奥のテーブル空いてる？」

「ああ、ちようど今、空いたトコ。」

賢はそう言つと意外そうな顔をした。

それはそうだろう。

いつもはカウンターに座る俺が

今日はカップルが座るような他の席からは

ちよつと死角になっていて隔離されている

とろろに座ろつとしてゐるんだから。

「今日の『本日のスープ』はスープカレーだよ。」

賢はいつも俺が『本日のスープ』を

オーダーするのがわかってゐるからか、

俺が聞く前に言った。

「てか、なんでイブなのにスープカレーなんだ？」

普通はクリームシチューとかビーフシチューとか

チキンコンソメスープとかもうちょとなんかあるだろ。」

「ちつつちつつ。わかってないねえー、おまえは。

それじゃ“普通”のスープ専門店になつちやうだろ？

それに今日のスープカレーはチキンが入ってる

クリスマス・バージョンなんだよ。」

賢は人差し指を立て、左右に動かしながら言った。

「まあ、いいけど。じゃあ、俺はそれで。」

「ははは、やっぱ、結局『本日のスープ』にするんじゃない。

なんならナンもつけようか?」

「なんなんだよ。クリスマスにナンで……。

ナンはいいや。おまえの場合、“難”を付けてきそつだからな。

ところで、高本さんは何にする?」

「あ、じゃあ私も『本日のスープ』で。」

「……そういえば、メシ食った?」

俺はふと気になった。

まさかと思うけど2、3時間くらいあそこに

いたみたいだから何も食べてないって事も有り得る。

すると、案の定高本さんは首を横に振った。

やっぱな。

「じゃあ、ナンも付けようか。」

その会話を聞いた賢は高本さんに

にこつと笑いながら言った。

相変わらず女にはいい顔しやがる。

「……おいしい。」

熱々のスープカレーをスプーンで掬い、

ふうふうと冷ましてから彼女は一口食べた。

そして、小さく笑いながら言った。

無表情と噂の彼女が少しだけだけど

笑っているのがとても意外だった。

ホントにあの高本さんなのか？

「そういえば、普段はメガネしてないんだね。」

彼女はいつも縁なしのメガネをかけている。

しかし、ツリーの下で声を掛けた時はもうしていなかった。

「はい、メガネは仕事の時だけなんです。」

あー、なるほど。

だから余計別人に感じるのかなあ？

「・・・で？あんなトコで何してたの？」

スープを食べ終わった後、それとなく、

さらりと聞いたつもりだった。

「・・・。」

けど、彼女は気まずそうに黙り込んでしまった。

「あ、いや、別にたいした問題じゃないんだけどさ、

ただちょっと気になったというか・・・。」

やっぱ、聞くべきじゃなかった・・・よなあ？

俺はちよつと後悔した。

すると、彼女は思い切ったように

「……人を待ってたんです。」

と、口を開いた。

「え……じゃあ、もしかして

勝手にここに連れてきちゃまずかった？」

やば……。

「あ、いえ……私が勝手に待ってただけですから。」

高本さんは違う違うという風に手を振って苦笑いした。

「彼が来ない事、わかってて待ってたんです。」

「？」

「・・・高校生の時に付き合ってた彼がいて、

その彼が他県の大学へ進学する事になって

遠距離恋愛になっちゃったんです。

最初は連絡も取り合ってたんですけど

そのうち段々、音信不通になっていって・・・

でも、イブの日に会おうって約束してたんです。

・・・ちっきのツリーの下で。」

「それで・・・その彼とは会ったの？」

なんとなく答えはわかっていた。

「いいえ・・・彼、来なかったんです。」

「だろうなあ・・・。」

来てたらこんな話にならないよな。

「その後、友達から彼が二股かけてたみたいだって聞いたんです。」

しかも相手の女の子、私とも仲が良かった子で、

私と彼が付き合ってたのも知ってたし、

よく一緒に遊んでたのに私、全然気がつかなくて。」

要するに彼とその相手の女の両方に裏切られたって事か。

「彼にしてみれば上手く乗り換えたつもりなんでしょうね。」

「でも、高本さんはその約束を忘れていなかった。」

「・・・はい。」

だから毎年イブの日にあそこで何時間も来るはずのない相手を待ってたのか。

「そんな男の事なんて、きれいさっぱり忘れちゃえ。」

「・・・簡単に言わないで下さい。」

「簡単だよ。新しい恋をすればね。」

「・・・。」

「また、裏切られるのが怖い?」

「・・・。」

「それで、そんな性格になっちゃったんだ?」

「……。」

彼女は否定もしないで黙っていた。

肯定もしないがおそらく俺が言った事は凶星なんだろう。

だから、自分と人との間に壁を作ってたのか？

「高本さんならもつといい男がみつかると思うけどなー？

くだらない嘘つかないで、約束をちゃんと守る男がさ。」

「そんな人、どこに……。」

「つーか、フツーにいるだろ。」

そのへんに。

「たとえば、俺とか。」

「……………」

高本さんはちらりと俺を見た。

まるで信じていないといった顔だ。

まあ、今までこれだけ壁を作ってたんだから

俺ごときが言ったところですからすぐに信じてもらえるはずはない。

「じゃあさ、明日の夜7時にまたあのツリーの下で待っててよ。」

「え……………」

「約束、指切りげんまん。」

俺はそう言って小指を立てた。

すると、高本さんも戸惑いながら小指を立て、

俺の小指と絡ませると、クスツと笑った。

30過ぎの大的男が子供みたいに指切りするのが  
可笑しかったんだろうか。

翌日。

社内で高本さんを見かけた。

いつものように縁なしのメガネをかけていて無表情だ。

昨夜のあの笑顔が嘘みたいだな・・・。

でも、この社内で彼女の笑顔を知っているのは俺だけ。

なんか優越感。

そして、夜。

俺は約束の7時よりも前にツリーの下に着いた。

時計を見ると6時55分。

5分前か。

高本さん、来るかなあー？

例の元カレとの約束ならともかく、

俺との約束だしな。

彼女が平気で約束を破る人だとは思えないけれど

やっぱりちょっと不安だ。

そうして、時計の針がちょうど7時を差した時、

俺の真後ろで男の声がした。

「千莉っ。」

セリ？

俺はもしやと思い、振り返った。

すると俺の目の前に男、さらにその男と向き合うように

高本さんが立っていた。

高本さんは、その男の後ろにいる俺には

まったく気付いていないみたいだ。

完全に意識が男の方についている。

「久しぶりだな、元気だった？」

その男はそう言つと高本さんに近づいた。

なんだ？

知り合いか？

それなら少し話が終わるまで待つかな。

俺は再び前方に視線を戻した。

この距離だと会話が聞こえてしまうけど、

ま、いつか。

「何年ぶりかなー。なあ、今から時間あるなら

飲みに行かないか？ゆっくり話がしたいんだ。」

え、おいおい。

高本さんは今から俺とデートだぞ？

俺は思わずその男に心の声で突っ込みを入れた。

「……………」

しかし、高本さんは黙っている。

あれ？

高本さん、断らないの？

「…………私なんかと行ったら、佐緒里に怒られるんじゃない？」

「え？知ってたんだ？てか、佐緒里とはもう別れたよ。」

「…………そ、そう、なんだ。」

「俺、今フリーだし。」

男はそう言つと、「だから、二人きりで飲みに行くのも全然有り。」  
と、続けた。

あらあゝ？

これは俺との約束すつぽかして、

この男と飲みに行つちやうパターン？

そう思っているよ、

「私、約束あるから。」とようやく高本さんが言った。

「ふーん、誰と？」

「それは・・・」

誰と？と、聞かれ、高本さんは返事に困ったのか

言葉を詰まらせた。

そろそろ俺は登場した方がいいんだらうか？

それとなく、ちょっとだけ振り返る。

すると、高本さんとはっちり目が合ってしまった。

「あ……。」

こうなるともう登場するしかない。

「お待たせー。」

……て、俺のほづが早く来てた気もするが、

まあ、細かいことはこの際どうでもいい。

「誰？」

男は俺が高本さんに近寄るとちょっと怪訝そうな顔をした。

「あ……えつと……」

そして、高本さんは俺と腕を組むと、  
意外な言葉を口にした。

「……………婚約者っ。」

んんっ？

俺は思わず高本さんの顔をじっと見た。

「……………」

なんだか、無言で何かを訴えている。

「……は……………一芝居打つとくか？」

「へえー・・・結婚、するんだ？」

その男は俺が高本さんの“婚約者”だと聞いて  
顔色を変えた。

「うん。・・・あ、それじゃ。」

高本さんは顔をちよつと引き攣らせ、

その男にそう言つと俺に「行きましょう。」と言つた。

「あ？・・・ああ。」

なんだかよくわからないけれど

とりあえず俺はその男に軽く会釈して

彼女が歩き出した方向について行つた。

「こっちになんかあんの？」

そして、ツリーからかなり離れても

歩く速度が落ちない彼女にそう聞くと、

「あ。」「と、ようやく足を止めた。

「し、ごめんなさいっ。」

「ん？何が？」

「勝手に婚約者なんて言っちゃって……。」

「あー、いいよ、別に。」

そう言った方が都合がいい相手だったんでしょ？」

「……。」

「まあ、上手く誤魔化せたみたいだから

よかったじゃん？」

「……元カレなんです。」

「……。」

なんとなく、なんとなくーくだけど……

そんな気はしてたんだよなー。

「さっきの人が昨日言った……。」

「高本さんがずっとあのツリーの下で待ってた人？」

「はい……。」

「じゃあ、戻ったほうが……」

「今ならまだ間に合うかもよ？」

「まだそんなに遠くに行っていないだろうし。」

「俺って意外とお人好しなのかもしれない。」

「自分でそう思った。」

「いえ、もういいんです。」

「でも、ずっと待ってた人なんだろう？」

「だって、せっかくのデートなのに。」

「他の男の所へなんかに行かせようとしているんだから。」

「彼は私と会う為にあそこに来た訳じゃないんです。

たまたま通りかかっただけで・・・それに、

さっき、彼の顔を見てわかったんです。」

「？」

「やっぱり、彼はあの約束の事も憶えてないって。」

「そうだとしても、彼は君と話したがってたみたいだし、

まだ君の事好きなんじゃないかな？」

・・・というより、元カノを目の前にして

振った事を後悔したってトコかな。

だって俺が婚約者だって聞いた時のあの反応は・・・

「でも、私はもう彼の事、好きじゃありませんから。」

そんなはずはないだろ？

「じゃ、どうして今でもあの約束を忘れずに

昨日もあのツリーの下で待ってたの？」

「・・・ただ、ハッキリさせたかっただけかもしれせん。

ちゃんと彼の口から“さよなら”って言葉を聞きたかった。」

「それだけの為に待ってたって言うの？」

「私もさっきまでは彼の事、まだ好きなんだと思ってました。

でも、実際に彼の顔を見たら違うって思ったんです。」

「……。」

「彼が佐緒里と別れたって言った時も・・・」

あ、佐緒里っていうのが私の友達だった子で、

彼、その子とも別れたらしくて。」

そういえば、そんなような会話が聞こえたな。

「それで、佐緒里と別れたって聞いても

今、彼女がいなくて聞いても彼の所に

戻りたいって思いませんでした。

二人で飲みに行こうって言われても、

全然そんな気になれなくて。」

「じゃ、そいつの事はもうきねいぢっはっは。」

「はい。」

高本さんは笑って返事をした。

「そっか。・・・ところで、婚約会見の会場はこっでいい?」

俺は目の前の店を指差した。

「へ?」

「実は、ちょうど予約してたんだよねー。」

そこは賢のスープ専門店だった。

「ま、前園さんっ、あ、あのっ・・・さっきのは、

その・・・っ・・・」

「急にデートになっちゃったから

クリスマスで予約が取れないと思ってね。

賢に電話してスープ以外も作ってもらおう事にしたんだ。

てか、今日の『本日のスープ』なんだろう？」

慌てている彼女を他所に俺は店のドアを開けた。

「賢はね、元々フレンチのシェフなんだよ。

だから実はフルコースも作れちゃうんだ。」

「あ、あの・・・前園さん。」

「ん？」

「婚約者の話はその・・・」

「あー、その話ね。俺はいきなり婚約でも全然構わないけど  
できれば恋人からって事にしてくれたほうがいいかなー？」

「あ・・・えと・・・でもー、

私、前園さんの事よく知らないしー。」

「よく知らないって事は、まったく知らない訳じゃないんだ？」

「顔と名前くらいしか知らないですよ？」

「それだけ知ってれば十分。」

「はぁ……。」

「俺も君の事は顔と名前と後、笑顔が可愛いつて

事くらいしか知らないよ？」

俺がそう言つと彼女は顔を赤くした。

「それに知らないから付き合いたいって思った。

お互いの事を知るためにね。

だから、つまりあれだ・・・宝くじみたいなもん。」

「へ？」

「宝くじ当たったら何に使おうとか買う前から

言っただって仕方ないだろ？」

「ええ、まあ・・・。」

「まずは、買ってみたいと。

てことで、まずは付き合ってみないと。」

「なんか・・・上手く丸め込まれてるような・・・。」

「気のせいだよ。・・・じゃあ聞くけどさ・・・。」

「？」

「社内の誰ともあまり接触をしようとしない君が

どうして、俺に昔の彼の事なんか話したの？

しかも、その彼の前で“婚約者”とまで言っちゃったし。

本音も曝け出してたじゃん？」

「……そ、それは……、自分でも

よく、わかりませんが……。」

「。じつは、じつは。」

「？」

「今日の『本日のスープ』が何か当たったら

俺と付き合っつてよ。」

「は？」

「あ、ちなみに俺、ここには死ぬほど来てるけど

『本日のスープ』のローテーションとか知らないから。

それでOK？」

「はぁ……。」

「よし……じゃ、本気で当てに行い。」

んー、そうだなあー……昨日が

スープカレーだったからー……」

「前園さん、私が当てちゃったらどうなるんですか？」

「え？んー、高本さんの言う事なんでも聞くよ。」

「わかりました。じゃあ、私も本気で当てに行きます。」

高本さんはそう言うと悪戯っぽい目になった。

「OK、よし、俺は決めた。今日はビーフシチューとみたつ。」

「私も決めました。」

「ん？何？」

「オニオンスープです。」

「あー、それも有り得るなあー。」

そして、そんな話をしていると、ちょうど賢が前菜を運んできた。

「よしっ、勝負だ。」

そう言っつて高本さんをちらりと見ると

「望むところですよ。」と笑っていた。

「賢、今日の『本日のスープ』何？」

「ん？ああ、今日はオニオンスープ。」

チーン……

呆気なく勝負終了……。

「あれ？一夜、どうしたんだ？」

「いや・・・なんでも・・・」

高本さんは口元に手を当ててププツと笑っていた。

そして、賢が再びキッチンの方に行くと、

「私の勝ちです。」

と、にっこり笑った。

「おかしいなあー・・・今日は絶対、

ビーフシチューだっていう気がしてたのに。

でも、まあ、男に二言はない。

約束は約束だからね。さあ、なんでも言ってくれ。」

そう言って俺が腕組みをして構えると

高本さんは「じゃあー・・・」と、少し考え、

「私、もっと前園さんの事が知りたいです。」

と、恥ずかしそうに笑って言った。

その後、『本日のスープ』を運んできた賢に

俺は“彼女”を紹介した。

- 5 - (後書き)

メリークリスマス  
皆様、楽しいクリスマスを (^ - ^ )

「ね、経理の前園さんて、彼女いるのかな？」

朝、会社のロッカールームで制服に着替えていると

そんな会話が聞こえてきた。

噂をしているのは私と同じ総務部の女子社員達。

普段、他人が話している会話なんて

気にならないのだけど・・・

“前園さん”

その名前に思わず私は聞き耳を立てた。

そしてその彼女達の話題に上っている

“前園さん”とは経理部の前園一夜さん。

背が高く、笑顔が可愛くて、愛想も良い人。

だから女性からの人気はもちろん、

男性からの人気も高く、いつも周りに誰がいる。

私とは正反対の人物だ。

「いそうだけど、前園さんイブの日に經理の人達と

飲みに行ってたよね？」

「うんうん、てことはないのかな？」

ブブツ。

彼女達のすぐ近くで会話を聞いていた私は

心の中で言った。

その答えは“ノー”だ。

だって、その前園さんの彼女というのは私だから。

私と一夜さんが付き合うようになったのは

クリスマスからだ。

確かに彼女達が言っているように一夜さんは

イブの日、飲み会に行った。

そして、その帰りに私と偶然会って、

彼の親友がやっているお店に連れて行ってくれた。

温かくてとてもおいしいスープの専門店。

次の日、私と一夜さんはもう一度同じ場所で待ち合わせをして

またあのお店に行った。

「一夜さんと付き合う事になったのはその時からだ。」

「前園さん、優しいから大事にしてくれそうだよね。」

「そーだけど、誰にでも優しいから」

それはそれで不安にならない？」

「あー、それは言える。」

その通り。

「一夜さんは誰にでも優しい。」

男性女性関係なく。

「それにちょっと軽そうだし。」

そうそう。

一夜さんは見た目ちょっと軽そうなんだよね。

髪もちよつと茶色で長めだし。

それに付き合う事になった切欠だって・・・

「浮気とかしそう。」

その事についても実は私もそう思っている。

一夜さんとは同じ会社にいるとは言え、

ほとんど顔を合わせることはなかった。

一夜さんがいる経理部は三階、私がいる

総務部は二階。

だからまともにしたこともなかった。

それでも彼と付き合ってみようと思ったのは

彼と一緒にいると自分を作らずにいられるから。

イブの夜、来るはずのない相手を待っていた私の前に

現れたのは一夜さんだった。

温かい手で頬に触れられた瞬間、私は

溶けていくような感覚を覚えた。

冷え切っていた体の中で何かが溶けていった。

私は昔の恋愛で受けた傷を引き摺って

自分と人との間にずっと壁を作ってきた。

“もう誰も好きにならない”

好きだった人に裏切られて、

そして同時に友達にも裏切られた。

“もう誰も信じない”

また傷つくのが怖くて一人でいる事を選んだ。

だけど彼はその壁をすり抜けるように私の中に入ってきた。

一体、どうやって入ってきたのかわからないけれど、

私は彼に興味を持った。

あれだけ壁を作ってきた私だけど

“この人は絶対に私を裏切らない”と、

その時なぜか思った。

まだ確信できていないけれど……。

ロッカールームを出て、自分のデスクに座り、

いつものようにパソコンを立ち上げると

一夜さんからメールが届いていた。

- - - - -

おはよう。

もう長谷川部長から聞いてるかな？

後で俺も手伝いに行くよ。

- - - - -

・・・？

メールの内容がさっぱりわからなかった。

何のことだろう？

長谷川部長とは総務部の部長だ。

その部長から何か話があるのだろうか？

パソコンの前で首を捻っていると

その長谷川部長が来て、すぐに意味がわかった。

「ちょっと急な話なんだが・・・、

今度、総務部が経理部と同じフロアに移る事になった。

仕事納めに合わせて引越しをするから、各自今日と明日、

荷物を段ボールに纏めておいてくれ。」

なるほど・・・一夜さんは一足先に経理部の方で

聞いていたのね。

明日は仕事納め。

毎年、私達が退社した後、清掃業者が入って大掃除をしてくれる。

それに合わせての引越しと言う訳だ。

引越し作業も荷物さえ纏めておけば引越業者がやってくれるらしい。

しかし、その荷物を纏めるのだけでも大変だ。

急な話だし、なにしろ年末で忙しい。

明日は仕事納めだからあまりやる事はないけれど。

今日はみんな揃って残業確定・・・かも。

夜7時。

ようやく通常業務が片付いて引越準備に取り掛かろうとしていると、

「うーす、手伝いに来たよー。」

一夜さんと経理部の男性社員が総務部に来た。

スーツの上着を脱いでネクタイを外し、シャツのボタンも

一つだけ外して腕捲りをする彼の姿に私は少しだけドキツとした。

一夜さんとは付き合い始めてまだ3日。

スーツを着ているところしか知らない。

だからこんな風にラフな感じの彼を見るのは初めてだ。

そして、そのラフな姿の彼にときめいているのは

私だけではなかった。

今朝、ロッカールームで一夜さんの噂をしていた

あの女の子達だ。

総務の男性社員と一緒に段ボールに書類や資料を詰め込み、

引越準備を手伝っている彼に熱い視線を送っている。

もちろん彼はその様子には気付くはずもない。

こうして私がもやもやした気分にいる事も・・・。

引越準備を始めてかれこれもう2時間、

経理部と同じ三階へ移った後のレイアウトは

すでに決まっているものの、それぞれの荷物と

パソコンの配線外しなどで意外にも時間がかかった。

それでも一夜さんや経理部の人達が手伝いに

来てくれたおかげでなんとか終わった。

そしてみんなで休憩室に行き、コーヒーを飲んでみると、

「前園さん、この後私達と一緒に食事に行きませんか？」

隣にある喫煙室からあの女の子達の声が聞こえてきた。

愛煙家の一夜さんと他の男性社員に混じって

同じ様に煙草を吸っている。

どうやら帰りに一緒に食事をして帰るつもりらしい。

休憩室と喫煙室の間には間仕切りというか

ガラス一枚で仕切られている。

だから休憩室にいれば自ずと会話も聞こえてくるし、姿も見える。

一夜さん、一緒に行っちゃうのかな？

「あー、ごめん、今日はちょっと無理。」

すると、一夜さんはあっさりと断った。

今日は何か用事があるなんて言っていなかったから、てっきり一緒に行くのかと思っていたのに。

「えー、じゃあ、明日は？」

「明日は納会があるでしょ？」

「じゃあ、その次の日とかは？忘年会しましょうよー。」

「うーん・・・俺、その日から帰省するからなー・・・」

一夜さんはあまり乗り気じゃないのか、困ったような顔をしている。

「それなら新年会は？」

そして、さらに彼女達が食い下がると、

「新年会かー・・・先の事はまだわかんないな。」

一夜さんはそう言って煙草を灰皿に押し付けると

スタスタと休憩室を出て行った。

「前園さん、逃げた・・・。」

「年明けにもう一回誘ってみようよ。」

「また断られたらどうするの？」

「新年会ってことなら大丈夫じゃない？」

一夜さんがいなくなった後、彼女達は早くも

次の作戦を立て始めた。

しかし、それは裏を返せば私も会えないという事だ。  
今日は無理だと言っていたし、明日は納会があるし、  
その次の日から帰省するって言ってたし。  
年明けもいつ帰って来るとか聞いてないし……。

あれ？

て、事はー……

一夜さんの顔が見られるのは明日が今年最後？

「はあー……。」

なんだかため息が出てきた。

一夜さんと付き合っているって言ったって

社内じゃ話せないし、もっぱら電話かメールだけ。

仕事帰りに一緒に食事もしていない。

私だって一緒に食事とかしたいのに・・・。

溜め息混じりに段ボールだらけの自分のデスクに戻ると

携帯が鳴った。

メールの着信を知らせる短い着信音。

誰だろう？

携帯を開いて見ると一夜さんからだった。

一夜さんと付き合う事になったといっても

私はまだ一夜さんからの着信やメールの受信も

特別な着信音に設定していない。

“普通”の着信音が鳴り終わった後、

メールの内容を確認すると、

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

賢の店で待ってて。

.....

とても短い内容だった。

それでも私はすごく嬉しかった。

さっきはあの女の子達に“今日は無理”なんて言っていたのに。

.....

うん。

.....

彼から来たメールより短い内容で返した。

でも、それは余計な言葉を並べるより

それだけでいい気がした。

「いらつしゃい。」

一夜さんとの待ち合わせ場所のお店に行くと、

彼の親友・寺田賢さんがにっこり笑いながら

迎えてくれた。

イブの夜、一夜さんが私を連れて来てくれた

あのスープ専門店だ。

「あれ？一夜は一緒じゃないの？」

「はい、後で来るそうです。」

「そう、じゃあ、一夜が来るまで何か飲んで待ってる？」

「んー、空きっ腹に飲んだらヤバそうだから、お茶で。」

「あれ？晩メシまだなの？」

「はい、今日はさっきまで残業だったんですよ。」

「そっか、OLさんは大変だね。お疲れ様。」

賢さんはそう言うとワーロン茶が入ったグラスを

私の前に置いた。

「OLさんみただけど、サラリーマンも大変だぞー。」

すると、私の後ろから一夜さんの声が聞こえた。

「おう、いらっしやい。」

「千莉ちゃん、お待たせー」

「あれ？一夜さん、今どこから入ってきたの？」

普通に入口から入ってきたらドアに付いている

ベルの音でわかるはずだ。

でもドアベルは鳴らなかった。

「ん？あっち。」

一夜さんはそう言うと入口とは反対の方を指差した。

「へ？」

一夜さんが指差した方向を見ると、

お店の裏口だった。

「え……なんで、裏口から？」

「まあ、なんとなく？」

一夜さんはそう言つと私の隣に座つた。

なんとなく・・・？

私が不思議に思つていと賢さんはクスクス笑いながら

「今日の『本日のスープ』は、おぼろ豆腐の和風スープだよ、

ちなみに梅風味。」

と言つた。

どうやら賢さんは、何故一夜さんがわざわざ

裏口から入ってきたのかわかつているらしい。

「俺は『本日のスープ』にするけど、千莉ちゃんはどうするっ..」

「じゃあ、私も。」

二人で『本日のスープ』を注文すると、

「まだメシ食ってないんだって？セットにする？」

と、賢さんが言った。

一夜さんはコクコクと煙草に火をつけながら頷いた。

セットは本日のスープに合わせたご飯物とおかずが付くらしい。

今日はじゃこ飯と出汁巻き卵と肉じゃがだ。

“スープ専門店”だけど、お客様からの要望も多いから

一応、こういう事もしているらしい。

「そつえば千莉ちゃんて、実家どこ？」

「千葉。」

「へー、年末年始は？やっぱり実家に帰るの？」

「うん、30日に帰る予定。」

「こっちには何時戻ってくるの？」

「3日のお昼に向いっつを出ようと思ってるけど。一夜さんは？」

「俺も同じかな。」

「一夜さんて実家はどこのの？」

「横浜。」

へー、横浜なんだー。

て、事は4日は会えるのかな？

うちの会社は5日が仕事始めだし、

一緒に初詣とか行きたいな・・・。

しかし・・・

話はそれ以上進まなかった。

一夜さんは別に初詣に一緒に行きたいとかないのかな・・・？

翌日。

今日は仕事納め。

昨日とは打って変わって激ヒマだ。

全ての締め処理は昨日で終わっているし、

年末のご挨拶に見えたお客様の対応とか、

後は自分の身の回りの整理とか。

それにしたって、何時間もかかるものじゃない。

一夜さん達経理部の男性社員も午後から

昨日と同じ様に「引越の準備で何か手伝う事ある?」と、

総務部に様子を見に来てくれたけれど、

既にやる事はなく、総務部の男性社員と共に

休憩室へ煙草を吹かしに行った後、そのまま経理部に  
戻っていった。

そして定時になり、今日は忘年会を兼ねた納会がある為、  
みんなで近くの居酒屋に移動した。

いつもなら私達総務部と一夜さん達の経理部は

一緒にやる事はないのだけど、年明けから

同じフロアになるという事もあって、

一夜さん達の経理部と一緒に納会をやる事になった。

一夜さんは案の定、あの総務部の女子社員達に捕まっていた。

居酒屋に移動する時からすでに一夜さんの両脇に張り付いていた。

もちろん、忘年会でもずっと一夜さんの両側をキープしている。

「……。」

一夜さん、楽しそう……。

あの様子だと今日はあの子達と一緒に帰るつもりなのかも。

むー。

「あれ？高本さん、全然飲んでないじゃん。」

チラチラと一夜さんの方を見ていると、隣に座っている

私と同じ総務部で同期の林田くんがいつの間にか

私のグラスにビールをなみなみと注いでいた。

「……あつ！林田くん、私、こんなに飲めないよ？」

そう言った時には既に遅く、林田くんは

「まあまあ、グイッといつちやって」と

にんまり笑った。

「う……、じゃあ……ちょっとだけ。」

一応、注いで貰ったからには一口くらい飲まないかね……。

「ホントにちょっとだけだね。」

林田くんは中身がほとんど減っていない私のグラスを見て

クスッと笑った。

「高本さんて、あんまり飲めないの?」

「そういうワケじゃないんだけど、」

今日はもうそろそろ帰らないといけないから。」

「え、もう帰っちゃうの？」

「うん、明日から帰省するから帰って準備しないと。」

・・・なんて、本当はこれ以上、一夜さんが

あの子達と楽しそうにしているのを見たくないから。

しばらくして私がお店を出ようとコートとバッグを持って  
立ち上がると、

「あれ？高本さん、もう帰っちゃうの？」

と、少し離れた席から声が聞こえた。

一夜さんだ。

「はい。明日、朝から帰省するのでお先に失礼します。」

「じゃあ、ちよつどよかった。」

「夜さんはそう言つと、」

「俺も明日帰省するからそろそろ帰ろつと思つてたんだよ。」

「大通りまで一緒に帰ろつ。」

と、立ち上がった。

え……。

「やだぁー、前園さん、もう帰っちゃうんですかぁー?」

「もう少しくらいいいじゃないですかぁー。」

「せめて、後30分くらいー。」

「夜さんに張り付いていた女の子達は甘えた声を出した。」

うわぁ・・・、あの子達完璧に酔ってる・・・。

「じゃあ、みんなお先にー、よいお年を」

一夜さんは私の真横に並んで、経理部と総務部のみんなに手を振った。

そして、お店から出て少し歩いたところで、

「千莉ちゃん、コーヒーでも飲んで帰らない？」

と、言った。

「うん？でも、一夜さん、時間大丈夫なの？」

「俺は平気。千莉ちゃんは時間ない？」

「ううん、大丈夫。」

私が返事をするとな夜さんは「じゃあ、こっち。」と、私の肩に手を回して細い路地に入った。

「一夜さん、酔ってる？」

「うん、ちょっとだけね。」

やっぱりね・・・だって、こんな風に肩に手を回すことなんて今までなかったもん。

「千莉ちゃんは？」

「私もちょっとだけ。」

「なーんか、林田と楽しそうに飲んでたみたいだけど？」

見てたんだ？

「そういう一夜さんも随分楽しそうだったじゃない？」

「あれえ〜？もしかして千莉ちゃん、ヤキモチ？」

「……。」

意地悪な言い方……。

「楽しくなんかないもん……」

「え……？」

「林田くんと飲んでたからって、どこが楽しそうに見えたの？」

「せ、千莉ちゃん……?」

「一夜さんのバカッ。」

「千莉ちゃん……やっぱり、結構酔ってる?」

「一夜さんは顔を引き攣らせながら私の顔を覗き込んだ。」

「だから……酔ってないってば……」

でも……こんな風に感情をぶつけちゃうのは  
自分でも酔ってるのかな?って、思った。

「……ごめん。」

すると、一夜さんは私をギュッと抱きしめて呟くように言った。

「ホントはヤキモチ焼いてたのは俺の方。」

「え……？」

「だって、千莉ちゃんの傍に行きたかったのに

三人も鬱陶しいのがびったりくっ付いてて、

気が付いたら林田が千莉ちゃんに飲ませてたから……」

「じゃあ、一夜さんは全然楽しくなかったの？」

「当たり前だろ？」

「一夜さんはそう言っと私に触れるだけの軽いキスをした。」

それが私と一夜さんの初めてのキスだった。

続編 - 初めての… 5 -

年が明けた午前0時。

私の携帯が鳴った。

ん？

こんな0時ぴつたり電話してくるなんて・・・誰だろう？

着信表示を見ると一夜さんだった。

「もしもしっ？」

『千莉ちゃん、明けましておめでとー』

「お、おめでとー。」

また、酔ってる・・・？

携帯越しに聞こえてきた一夜さんの声は

やけにハイテンションだった。

『今年もよろしくね』

「一夜さん、また酔ってる。」

『うん』

「・・・。」

素直だね・・・。

『酔ってるけど、年明け一発目に千莉ちゃんの声が聞きたかったか  
』。』

そんな風に言われるとちょっと嬉しい。

怒る気になれないじゃん。

『千莉ちゃん、早く会いたい。』

「一夜さん、それ本気で言ってる?」

『もちろん』

ホントかなあー?

『ねえ、千莉ちゃん、4日は空いてる?』

「。ひひ」

『デートしたい』

「へ？」

『ダメ？』

「そ、そんな事ない・・・けど。」

『じゃあ、約束ね？』

「・・・うん。」

「一夜さん、酔ってるのに約束して大丈夫かなあー？」

『それじゃあ、4日の朝10時に迎えに行くから。』

「あ……うん。」

とりあえず、“うん”とは言ってみたものの、

果たして一夜さんがこの約束を憶えているかどうか

いまいち不安だ……。

そして、約束の4日。

やけに朝早く目が覚めた。

昨夜、何を着て行こうかとあれこれ悩んでいて

夜中まで起きていたのに。

「一夜さん、約束憶えてるかなあー？」

独り言を言いながら時計を見ると、9時50分だった。

10時に迎えに来るって言ってたけど、本当に来るのかなあ？

・・・それから、

5分が過ぎ・・・

10分が過ぎ・・・

・・・で、10時になった。

シーン……。

携帯も鳴らない。

メールも来ない。

もちろん、インターフォンだって鳴らない。

「はぁー……。」

溜め息が出てきた。

一夜さん、やっぱり憶えてなかった……。

せっかくだから、一人でお買い物にでも行こうかな？

そう思っていると、携帯が鳴った。

私は着信表示も見ずに通話ボタンを押した。

「もしもし。」

『俺。』

ん？

あ…

「一夜さん？」

『うん。』

「・・・今、どこ？」

自分の部屋かな？

『千莉ちゃん家の前。』

「えっ。」

『実はすっかり一方通行の道に入っちゃってさ、抜けるのにちよつとね・・・』

早めに家を出ただけで、結局遅刻しちゃった。ごめんね。』

「あ、うっん。」

一夜さん、覚えてたんだ・・・？

コートとバッグを持って急いで部屋を出るとアパートの前に  
黒いセダンの車が停まっていた。

あの車かな？

会社の帰りに一夜さんと会った時はいつもタクシーで  
送ってくれていた。

だから、一夜さんの車を見るのは今日が初めてだ。

運転席には一夜さんの姿があった。

一夜さんは私に気がつくまで車から降りて、

助手席側のドアを開けてくれた。

「おはよう。」

そう言って小さく笑った一夜さんはいつもと雰囲気が違っていた。

「おはよ……。」

私が一夜さんの顔をじっと見ていると、

「？」

「一夜さんはどうしたの？」と言った顔をした。

「なんかいつもと雰囲気が違って見えたから……。」

「今日はスーツじゃないからね。」

「あ、そっか。」

だからなんだ。

一夜さんはニットにジーンズとラフな格好だ。

黒に近い色のブルージーンズに少し濃いグレーのニット。

もっと明るい色を着る人なんだと思っていたから意外だ。

だけど、全然地味に見えないのはどうしてだろう？

一夜さんは私を先に助手席に乗せた後、

運転席に座った。

一夜さん、こーゆーの慣れてそう。

なんか、さらっとやっちゃってるけど。

「千莉ちゃん、もう初詣行った？」

「ううん、行ってない。」

「じゃあ、俺もまだだから今から行く？」

「うん。」

私が返事をするとな夜さんはアクセルを軽く踏み込み、ハンドルを切った。

運転も意外に安全運転だ。

急にハンドルを切ったり、車間を詰めたりしていない。もちろんスピードだって周りの車に合わせているから出しすぎなんて事もないし、急ブレーキなんて事もない。

出発して1時間。

「一夜さんは今日はまだ煙草も吸っていなかった。」

「一夜さんって、煙草あんまり吸わないの？」

「うーん、仕事中は1、2時間に一本かな。」

「でも今みたいに運転してる時はほとんど吸わないよ。」

「どっしょして？」

「車の中が煙草臭くなっちゃうでしょ？だから。」

「渋滞してる時は窓全開にして吸う時はあるけどね。」

わりと派手目の服にアクセサリ。

運転も荒くてヘビイスモーカー。

私の中のそんな一夜さんのイメージが見事に覆された。

続編 - 初めての… 7 -

「・・・ちゃん。」

「一夜さん？」

「千莉ちゃん。」

「一夜さんの声がして目を開けると、私の目の前に一夜さんの顔があった。」

102

「っ!?!?」

しかも助手席のシートが倒され、私の体に

「一夜さんのコートがかけられている。」

「・・・あっ!」

私・・・寝てた・・・？

「着いたよ。」

自分が寝ていた事にショックを受けていると

一夜さんは優しく笑いながら言った。

「あ・・・」

外の景色に目をやると、そこは私のアパートの前だった。

確か・・・

埼玉の神社に初詣に行って、それから境内を

散策して都内に戻りがてら寄り道でいろんな所に行って、

さらにその途中で夕食を食べて・・・

えーと、その後は・・・

その後・・・？

その後から記憶がない。

多分、昨日あんまり眠れなかった所為で

おなかいっぱいになって睡魔が襲って来ちゃったんだろっな・・・。

あー・・・最悪だ、私。

「し、しめん・・・」

「ん？」

「寝ちゃって……。」

「いや、俺の方こそ、ごめん。千莉ちゃんが疲れてたの

気付いてあげられなくて。」

カーオーディオのデジタル時計はまだ20時を過ぎたばかりだった。

一夜さん、私が疲れてると思って早く送ってくれたのかな？

「ううん、違うの。」

“違う”と、言ったところで今さら本当の理由を言うのも

恥ずかしいけれど。

「いいよ、無理しなくて。」

一夜さんはクスツと笑った。

私、そんなに“マジ寝”してたのかな？

「あー、そうだ。千莉ちゃん、コレ横浜のお土産。」

そして車から降りる時、一夜さんが後部座席から小さな紙袋を取って私に持たせてくれた。

「シュウマイ。」

「あ、ありがとう。」

「それじゃあ、また明日、会社で。」

「うん。。。」

「おやすみ。」

「一夜さんはそう言つと私に優しくキスしてくれた。」

「この間よりも長くて優しいキスだった・・・。」

部屋に戻つて、一夜さんに貰つたシューマイを

冷蔵庫に入れたほうがいいのか、冷凍庫に入れたほうがいいのか  
確認しようと紙袋から出した。

後は賞味期限も見ておかないと。

「？」

「ただ包装紙に貼つてある表記ラベルには賞味期限や

“要冷蔵”なんて事も書いていなかった。

仕方なく包装を解いて中の箱を出してみただけで、  
どこにも何も書いていない。

んー？

不審に思い、箱を開けてみると・・・

中に入っていたのは、シューマイ。

だけれど・・・

それはシューマイの実物大マスコット人形だった。

普通のシューマイみたいに箱に詰めてある。

一瞬だけ見たら誰もが本物と見間違っただろう。

「・・・。」

やられた・・・。

“ シュウマイ ” っ て 一 夜 さ ん が 言 っ た 時、

や け に 可 愛 い 笑 顔 で 言 っ た と 思 っ た ら ・ ・ ・

私 は 一 夜 さ ん の 可 愛 い 笑 顔 に ま ん ま と 騙 さ れ た の だ っ た  
。

続編 ・ 初めての… 8 ・

.....

おはようございます。

シューマイごちそう様でした。

.....

翌朝、会社のロッカールームで

携帯から一夜さんにメールを送った。

.....

おはよう。

おいしかったでしょ？

.....

すると、すぐに返事が返って来た。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

ええ、とつても・・・

びっくりした(・・  
―  
(

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

その時の千莉ちゃんの顔、

見たかったな

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

もうっつ

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

.....

ところで、昨日はあれから

ちゃんとゆっくり休んだ？

.....

.....

うん、ありがとう

昨日は本当にごめんね。

.....

.....

いいよ、そのおかげで千莉ちゃんの

可愛い寝顔がたっぷり拝めたし

.....

え．．．っ。

．．．

（。；

．．．

．．．

千莉ちゃんが寝てる間に

キスもいっぱいしちゃった

．．．

ええーっ!?

．．．

よ、夜這い．．．@)@\_@\_

- - - - -

- - - - -

うへっ、失礼な。

それより早く上がっておいで。

顔見たい

- - - - -

そういえば今日から一夜さんと同じフロアになるんだった。

- - - - -

うん。

- - - - -

3階に上がると一夜さんは既にデスクに座っていた。

でも、特にバリバリと仕事をしている訳ではなさそうだ。

だって今日は仕事初めで、やる事と言えば

年始のご挨拶に来たお客様とか、

たまに鳴る電話の応対くらいだ。

一夜さんは私に気がつくとはんの少しだけ口元を緩めた。

新しく配置された私のデスクはちょうど一夜さんのデスクと

向かい合う感じで顔が見える位置だった。

私の真向かいに同期の林田くん、そして向こう側に

経理部の部署があつて、私の二年先輩の女子社員・西川さんが座っている。

一夜さんはその西川さんの向かい側のデスクだ。

ちなみに一夜さんに張り付いていたあの三人組のデスクからも

一夜さんの顔が見える。

フロア全体で年始の朝礼があった後、部署毎に分かれてまた朝礼。

その後はさっそく引越後の荷解きとパソコンの配線なんかが待っている。

そして、経理部の人達が年末と同じ様に手伝いに来ると

例の三人は待ってましたと言わんばかりに

「前園さん、こっち手伝ってください。」

と、捕まえていた。

あゝあゝ．．．一夜さん、また捕まってる．．．。

「高本さん、一人で出来そう？」

「へ？」

一夜さんとあの子達の方をなんとなく気にしながら

パソコンを繋いでいると、またしても林田くんが真横に来ていた。

「あ、うん・・・多分、大丈夫。」

「・・・で、高本さん、それ、そこじゃないよ。」

「えっ。」

「プリンターはこっち。」

林田くんは私がとんでもない繋ぎ方をしていたのか、

プププツと笑いながら繋ぎ直してくれた。

「あ、ありがとう。」

そう言いながらちらりと横目で一夜さん達の方を見ると

やっぱりあの子達が両側にびったり張り付いていた。

一夜さんのバカーツ。

数週間後。

朝、いつものように出社してロッカールームに入ると

例の女の子達の声が聞こえてきた。

「えーっ！シヨックう〜っ。」

「それってホント？」

今日も朝から三人で噂話のようだ。

「絶対、あれは前園さんだった。」

え・・・？

彼女達の話のネタはまたしても一夜さんだった。

「見間違いじゃないの？」

「絶対、間違いないってば。」

「で、ホントに女の子と一緒にだったの？」

げげっ……どこかで見られた？

嫌な汗が出てきた。

しかし、次の瞬間……

「うん、昨日なんか女子大生みたいな子を助手席に乗せてた。」

昨日？

???

昨日は一夜さんとは会社帰りに会っていない。

それに女子大生って・・・？

「もしかして、彼女なのかな？」

「えー、だとしたら超ショックっ！」

「前園さん、ああいうのがタイプなのかな？」

「ねえねえ、どんな子だったの？」

「んー、可愛い感じの子だった。」

「それでそれで？」

私はそれ以上聞きたくなくて、逃げるようにロッカールームを出た。

一夜さん、それって・・・

どういう事？

デスクに座って、一夜さんの方を見ると

眉間に皺を寄せながら黙々と仕事をしていた。

さっきあの子達が話していた事、本当なのかな？

聞いてみたいけど・・・聞けない・・・。

こんな時、一夜さんの方からメールでも来れば、

ついでにさうっと聞けるのにな。

でも、そんな時に限ってメールが来ない。

そして、悶々とした気持ちのままさらに数日が過ぎたある日。

一夜さんが会社を早退した。

会社に一本の電話が一夜さん宛てに掛かってきて、

その直後に血相を変えて早退した。

何かあったのかな？

昼休憩に携帯に電話してみたけれど一夜さんは出なかつた。

電源も切っている。

夜になってもう一度電話を試してみたけれど、

やっぱり出なかった・・・。

どうしたんだろう？

翌日、一夜さんは午後から出社した。

.....

何かあったの？

.....

さすがに気になってメールしてみた。

でも、一夜さんから返って来たメールは・・・

.....

昨日は電話くれてたのに出られなくてごめんね。

ちょっと、いろいろあって。

- - - - -

詳しい事は何も教えてくれなかった。

私には話せない事？

- - - - -

大丈夫？

- - - - -

- - - - -

うん、たいした事じゃないから。

心配してくれてありがとう。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

そのメールの後に一夜さんは私の方に視線を向け、

少しだけ笑ってくれた。

私もちょっとだけ笑みを返すと一夜さんは

すぐにパソコンに視線を戻した。

でも、さっきよりも少しだけ表情が柔らかくなっていた

。

それから数日間、一夜さんはほぼ定時で退社していた。

“たいした事じゃないから”

そう言っていたのに・・・。

しかも、今日は会社を休むとさっき電話があったらしい。

その電話を西川さんが受けたらしく、経理部の部長と

話しているのが聞こえた。

「前園さん、なんか熱がぶり返したらしくて

病院へ行くので今日はお休みさせてくださいとの事です。」

え・・・熱？

一夜さん、風邪ひいてたの？

だから、ずっと早退したり定時で退社してたりしたんだ……。

それならそれで言うてくれればよかったのに。

一夜さん、困ってないかな？

熱があるならご飯だつて作るのも辛い。

帰りに一夜さんのマンションに行ってみようかな？

一夜さんのマンションにはまだ一度も連れて行ってもらった事はない。

だけど住所だけは付き合い始めた頃に教えてもらっていた。

定時になり、私は昼休憩にこっそりプリントアウトした

一夜さんの家の周辺地図を片手に退社した。

私のアパートから2駅向ここの駅から徒歩5分くらいにあるマンションだ。

大通りにも面していて綺麗でわかりやすい場所だった。

いきなり押しかけて行ったら怒られちゃうかな？

でも、せっかくここまで来たんだし・・・

マンションに入る勇気が出なくて悩む事数分。

エントランスの前に突っ立っていると中から誰かが出てきた。

あ・・・

「一夜さんっ!?!?」

「千莉ちゃんっ?」

中から出てきたのは一夜さんだった。

「千莉ちゃん、どうしたの?なんで、こじこじ・・・」

「え・・・、一夜さんこそ寝てなくていいの?」

「は?」

「・・・え?」

「ん?」「ん?」

しばし、二人で顔を見合わせて首を傾げた。

「私、一夜さんが熱出して大変だって聞いたから・・・」

それでその・・・ご飯とか、困ってないかなーって・・・」

実はここに来る前に駅前のスーパーで食材を買って来ていた。

「それでわざわざ来てくれたんだ？」

「う、うん・・・て、やっぱり迷惑だった？」

「全然つ、えーと・・・とりあえず、立ち話もなんだから。」

「一夜さんはそう言っと私の手から買い物袋を受け取り、」

部屋に案内してくれた。

「今、お茶淹れるから座ってて。」

「でも、一夜さん、熱あるんじゃない・・・」

「あー、いや、それ俺じゃないんだ。」

「？」

「??？」

「夜さんじゃないなら・・・誰？」

「妹。」

妹？

「千莉ちゃんにはちゃんと話しておかなきゃって思ってたんだけど、なんか、ごたごたしてて言いそびれちゃって。」

実は俺、妹と一緒に住んでて、それでその妹が

この間、風邪でぶっ倒れちゃってね。」

「だからずっと定時で退社してたの？」

「うん、それで一昨日やっと熱が下がって安心したら、

あいつ昨日、大学に行きやがってさー。

・・・で、また今朝になって熱がぶり返したから

大慌てで病院に連れて行ったんだよ。」

「妹さんて・・・大学生なの？」

「うん、俺とは年が離れてるんだ。」

じゃあ・・・あの子達が言った“女子大生みたいな子”って・・・

「やっぱり、なんか誤解してた？」

「夜さんは私の顔を覗き込んだ。」

「……。」

「例の三人組にしつこく聞かれたから。」

「？」

「この間の夜、妹を迎えに行って一緒に帰ってるところを

どこかで見かけたらしくてね。」

妹だって言っても全然信じてなかったみたいだし。」

それでそういう噂ってすぐ広まっちゃうだろ？」

だから千莉ちゃんの耳にも入ってたかなー？って。」

「うん……。」

「それで千莉ちゃんに言っとかなきゃって思ってたんだけど、

なんかいきなり聞かれてもないのにあれは妹だからって言うのも  
なんだし、

タイミングを見計らってたら言いそびれちゃった……ごめん。」

「ううん。」

私はあの子達の噂話を聞いて、もしかして一夜さんが

浮気してるんじゃないかって思った。

でも……やっぱり一夜さんはそんな人じゃないよね？

「・・・？このお粥、お兄ちゃんが作ったの？」

一夜さんの妹さん・みちるちゃんは私が作ったお粥を

一口食べて怪訝な顔をした。

もしかして、口に合わなかったかな？

「いや。」

そして、一夜さんがそう答えると「だろうね。」と、笑った。

みちるちゃんはその三人組が言っていた通り、

可愛らしい子だった。

口元が一夜さんそっくりだ。

「お兄ちゃんが作ったお粥なら、もつと不味いもん。」

だからきつと千莉さんが作ってくれたんだと思った。」

みちるちゃんにそう言われ、一夜さんはちょっとムツとした顔をした。

「おまえ、そんな文句言えるようになったんなら

もう大丈夫だな？」

「うん。」

「じゃあ、明日は俺、会社に行くからな。

でも、ちゃんと治るまで出歩くなよ？」

「はあ〜い。」

みちるちゃんはバツが悪そうに返事をする

「一夜さんが食べているコロッケをつまみ食いました。

ちなみにコロッケは私がお粥を作っている間に

一夜さんが私と一緒に食べようと買って来てくれたものだ。

「あ、こらっ。」

「お兄ちゃん、スープも食べたい。」

みちるちゃんはにんまり笑って一夜さんに言った。

『本日のスープ』は、私が作ったミネストローネだ。

「んあっ？なんだよー、俺が作った時なんてそんなに食べないくせに。」

「だって、お兄ちゃんのお粥は“作った”と言うより

“温めた”だけのレトルトじゃない。

うどんだって火にかけるだけのだし。」

「しょうがないだろー、俺は料理苦手なんだから。」

ところで、千莉ちゃん、スープってまだ残ってる？」

「うん、明日のお昼の分まで作っておいたから、

まだあるよ。」

「じゃあ、俺もおかわりしよう」と

一夜さんは嬉しそうに言うと、自分とみちるちゃんの分のスープを装った。

1時間後、

「んじゃ、俺は千莉ちゃんを送ってくるから、

お前はちゃんとおとなしく寝てるよ？」

一夜さんが私をアパートまで送ってくれることになった。

「は〜い、ごめっくり〜」

みちるちゃんは一夜さんににやりと悪戯っぱい顔を向けた。

「“ごめっくり”って、おまえ・・・」

一夜さんはちょっと眉間に皺を寄せ、ビミョーな顔をした。

「みちるちゃん、熱も下がって食欲も出てきたみたいだし、よかったですね。」

「俺は熱出して黙って寝てるくらいのがいいけどな」。

千莉ちゃんも聞いたでしょ？あの文句の言い様ったら。

俺がこの数日間、あいつの為に作ったお粥やうどんを

不味いだのなんだのって・・・」

「でも、一夜さん心配で堪らなかったんでしょ？」

会社にいる時もそんな顔してたし。」

「う……」

一夜さんは運転しながら前を向いたまま言葉を詰まらせた。

「……まあ、あいつの面倒見てやれるのはこっちじゃ俺しかいないしな。」

でも、今日は千莉ちゃんが来てくれてホント助かったあー！。

ありがとね。」

「私、別にたいした事してないよ？」

「いやいや、俺が作ったお粥やうどんじゃ、みちるは

後2、3日は寝込んだ。」

「あはは、大袈裟。それは一夜さんが病院に連れて行ってあげたからよ。」

「ホントだって。」

「一夜さんて、そんなに料理苦手なの？」

「うん、俺の唯一の弱点かな。」

「一夜さんはそう言うとニカッと笑った。」

そして、一夜さんのマンションから

20分くらいで私のアパートに着いた。

「一夜さん、うちでお茶でもどしゅ？」

いつも送って貰ってばかりだし、思い切って言うてみた。

「いいの？」

「だって、いつもそのまま帰っちゃうから・・・」

「じゃあ、遠慮なく。」

一夜さんは小さく笑うと駐車場に車を停めた。

部屋の鍵を開けて中に入ると、一夜さんはすぐにドアを閉め、いきなり私を抱きしめた。

「い、一夜さん・・・ん？」

「夜這い。」

そして私の耳元に甘い声で囁いた。

「へ？」

「この間メールで言ってたでしょ？」

「え……いや、あれは……」

「本当の“夜這い”って言うのは、こういう事を言っただよ？」

「夜さんは意地悪な顔つきでにやりと笑うと、」

「……千莉。」

と、優しく私の名前を呼んだ後、唇を重ねた。

続編 ・初めてのの… 11 - (後書き)

これにて続編「初めての…」は終了です。

明日は番外編「バレンタイン・デー」をUPします！ (^ - ^ )

番外編 - バレンタイン・デー 1 -

初めての“夜這い事件”から数日後。

今日は私にとって特別な日。

所謂“バレンタイン・デー”だ。

ここ数年、私はこの日を気にした事はなかった。

あげる相手が特にいなかったから。

うちの会社ではバレンタインデーとか

ホワイトデーとかそういうイベントは禁止されている。

だから、義理チョコなんかも渡したことがない。

もちろん、それは社内恋愛自体を禁止しているわけではないから

個人で“本気<sup>マジ</sup>チョコ”を渡すのは自由だけれど。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

今日、会社が終わった後

時間あるかな？

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

朝、一夜さんにメールを送ってみた。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

うん、あるよ。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

やった



さらに一夜さんから来たメール。

私はそのメールを見て思わず顔が綻びそうになった。

今年は思い切って一夜さんに“本気チヨコ”を渡そうかな・・・  
と、思っていたから。

しかし、そう思っていたのは私だけではなかった。

昼休憩、メイクを直した後、休憩室に向かっていると

パーティーションで区切られた一角から例の三人組と

一夜さんの声が聞こえてきた。

立ち聞きするつもりはないけれど私は思わず足を止めた。

私の位置からは一夜さんと彼女達の姿は見えない。

そして一夜さん達からも私の姿は見えていない。

「どうして受け取ってくれないんですか？」

「だって、こいつうちの社内で禁止されてるでしょ？」

「でも、それって“義理チョコ”の場合ですよね？」

「うん、そうだね。」

「じゃあ、私達のは“本命”なんで受け取ってください。」

うわ……チョコ渡してる。

一夜さん、受け取っちゃうのかな？

「本命”なら尚更受け取れないよ。」

しかし、一夜さんは受け取るのを拒んだ。

「. . . どうしてですか？」

うんづん、どうして？

「彼女がいるから。彼女以外から“本命”なんて

貰ったりしたら彼女が傷つくでしょ？

だから受け取らない。」

「. . . . .」

一夜さんがキツパリ言つと、彼女たちは黙り込んでしまったようだ。  
った。

そして黙って聞いていた私は驚いて逆に声を上げそうになった。

「前園さんの彼女って、あの女子大生の子ですか？」

「だから、それは妹だってば。」

少しかだけ笑っているけれど、ちょっとうんざりした感じの声で

一夜さんは答えた。

あの子達、ホントにみちるちゃんが“彼女”だと思ってたんだ？

「じゃあ、社内の人ですか？」

「それ、君達に言う必要ないでしょ？」

「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」

そして、また黙り込む三人組。

そこで私はその場から立ち去った。

夕方、定時の少し前。

一夜さんからメールが来た。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

19時前くらいには会社出られそう？

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

うん。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

- - - - -

じゃあ、会社の裏口にある喫茶店で待ってて

- - - - -

- - - - -

うん、わかった。

- - - - -

メールを返してちらりと一夜さんの方を見ると

真剣な顔で仕事をしていた。

こういう真剣な顔の一夜さんもすごくかっこいい。

そして、例の三人組を横目で見ると黙々と仕事しているものの、

三人とも表情はとても暗かった。

おまけに定時ピッタリで退社。

昼間の事で相当落ち込んでいるみたいだ。

これで三人とも一夜さんの事、諦めてくれるかなあ？

番外編 - バレンタイン・デー 2 -

「いつの間にお店予約してたの？」

「ふっふーん 一週間前。」

「一夜さんは一週間前からすでに今日、

会社の帰りに私と会う事を決めていたらしく、

最近、新しくできたお店を予約していた。

私、一夜さんが今日会ってくれるかどうかわかんなかったから

なんにもしてなかったのに。

「ここってね、料理はもちろん、チョコレートを使った

デザートが美味しいって噂なんだよ。」

「えー、全然知らなかった。」

「逆チョコ」

「へ？」

「バレンタインに男性が女性にチョコを贈るってアレ。

けど、フツーにチョコを渡したんじゃ面白くないし、

それなら二人で美味しいチョコのスイーツを

食べたいなーっと思って。」

えー、うそおー？

「千莉ちゃん、固まった。」

一夜さんは口を開けたまま驚いている私に

クスクス笑いながら言った。

「うー・・・なんか、私、一夜さんにやられてばっかりー。」

「そんな事ないよ」

そう言っつて、両手で頬杖をついてニコニコしている顔は

勝ち誇った感じが滲み出ていた。

一夜さんが言っていた通り、料理もそしてデザートの

“タルト・オ・シヨコラ”もすごく美味しかった。

でも、でも、でも・・・っ！

ここからは私が絶対、一夜さんに“サプライズ”するんだもんっ。

食事の後、一夜さんに“本気チョコ”と一緒に、  
とある物を渡した。

一つはスターリングシルバーのジッポライター。

もう一つは……

「千莉ちゃん、この鍵……」

一夜さんは予想通り、“もう一つのプレゼント”を見た瞬間、  
目をパチパチとさせていた。

「私の部屋の鍵。」

「え？」

そして今度は一夜さんが固まった。

「一夜さん、口開いてる。」

「一夜さんで、こつこつ顔もするんだ？」

かわいい

「・・・い、いいの？」

「だって、一夜さんは私の彼氏だし。」

「持ってて貰いたいから。」

「てことは・・・」

「一夜さんは顔をあげ、手に持っていた鍵と私の顔を交互に見て、

「つまり・・・」

そして、ニッと笑ひつゝ、

「それって、毎日“夜這い”に行ってもいいって事？」

と、周りのお客様に聞こえないように小声で言った。

「えっ!？」

えええええええっ!？

なんでそうなっちゃうの？

「やった」

「え、ちが・・・っ。」

「でも、毎日行けるかなあ？」

「一夜さんっ、私、そういう意味で渡したんじゃ・・・」

「ありがと、千莉ちゃん」

「だ、だから・・・ちがうってばっ。」

それから一夜さんはずっとニコニコしていた。

私の“サプライズ作戦”はある意味成功、ある意味失敗に終わった。

続編 ・チケットは二度彼女の手が届く 1・

「ん？ なんだこのメール」

後、数日でホワイトデーというある日、ちょっと変な社内メールが届いた。

-----

経理部、総務部の男性社員の皆様へ

お疲れ様です。

さて、本日メール致しましたのは来る3月12日（木）に行われる経理部と総務部による『合同ボーリング大会』の裏企画のご案内です。

それに先立ちまして経理部と総務部の女性社員の中から人気投票を行いたいと思います。

添付の名簿の中から“この人とデートしたいっ！”と、思う女性社

員を選び、

その方のお名前をこのままこのメールにコピーペーストして返信ください。

宜しくお願い致します。

尚、この裏企画にしましては女性社員の方々には他言無用願います。

『合同ボーリング大会』 幹事・経理部 松本

総務部 佐々木

-----

『合同ボーリング大会』とは、毎年決算の直前にそれぞれの部署で行われる

要するに“決算を頑張って乗り切ろう会”みたいなもの。

以前は総務部と合同でやることはなかったのだが、

今年の初めに同じフロアになったから

こうして総務部とも一緒に何かをやる機会が増えたのだ。

まあ、俺としては千莉ちゃんがいるから嬉しいけれど。

それにしても女子社員の人気投票って……

(そんなのやる前から千莉ちゃんが一番人気に決まってるだろう？

てか、この“裏企画”ってなんだよっ？)

もちろん俺は千莉ちゃんに投票して返信したけど、どうも釈然としない。

翌日。

昨日と同じ様に経理部と総務部の男性社員にだけ投票結果が社内メールで届いた。

( やっぱりな…… )

一位はダントツで千莉ちゃんだった。

二位は俺の目の前のデスクに座っている西川さん。

この子もわりと美人系。

でも“ ツンデレ ” キャラではない。

どちらかと言うとまあまあ気さくな方だ。

三位以下は……

面倒臭いから省略。

てか、少数票ばっかだしな。

ふと顔をあげて千莉ちゃんをチラ見すると真剣な顔で仕事をして  
いた。

今日も相変わらず無表情だ。

そして、数日後。

『合同ボーリング大会』の当日、幹事の松本と佐々木から裏企画の  
詳細メールが来た。

.....

経理部、総務部の男性社員の皆様へ

お疲れ様です。

お待たせ致しました！

『合同ボーリング大会』の裏企画の詳細です。

本日のボーリング大会は裏企画として、『男性の部』の優勝者と先日行いました

女性社員の人気投票一位の高本さんとのデート企画をご用意しております。

3/14(土) ホワイトデー限定の『ロイヤルディナークルーズ』をペアでご招待！

チケットは既に高本さんに渡してあります。(彼女はまだ何も知りません)

後は男性社員の皆様にデート権を賭けて戦って頂きます！

頑張って我が社のマドンナとのデート権をげつとしてください！

もちろん幹事の松本と佐々木も本気で狙いにいきますよ！

尚、長谷川部長と伊藤部長は裏企画には参加なさらないそうです。

『合同ボーリング大会』 幹事・経理部 松本

総務部 佐々木

.....

「.....」

俺はメールを読んで愕然とした。

( “俺の” 千莉ちゃんとデートだあ〜っ？ )

ふざけんな、ふざけんな、ふざけんなーっ！

冗談じゃねえ.....っ。

しかも、幹事の二人も本気だどー？

それとなく周りを見てみると、ほとんどの男性社員が

千莉ちゃんに視線を向けていた。

(ああ……こんな事ならさっさと交際宣言しておけばよかった……)

俺と千莉ちゃんは未だに社内の人々には内緒で付き合っていた。

それは千莉ちゃんがあまり言いたそうじゃなかったから。

まあ、普段会社で“クールビューティー”を突き通しているから

今さらキャラを変えて「私達付き合い合ってマース」なんて言えないのだろう。

何も知らず黙々と仕事をしている千莉ちゃんの顔を見ながら

とりあえず煙草の一本でも吸って落ち着こうと休憩室に行くと、

「お疲れ様です」

松本の声がした。

今回の幹事の一人だ。

「おう」

「今日のボーリング大会楽しみですね」

松本は俺の目の前に座り、にやにやしていた。

（多分、こいつが企画したんだろうなー）

「そうだな」

「前園さん、こーゆー裏企画大好きでしょ？」

「……まあな」

確かに俺はこの手の企画は嫌いじゃない。

寧ろ好きな方だ。

だが、それは“彼女”がいない場合だ。

(デートの相手が千莉ちゃんじゃなかったら思いっきり手を抜くんだけだなー)

「あつ、てか、おまえ昨日やけに早く帰ってたけど……

まさか練習とかしに行っていないだろうな？」

幹事の松本と佐々木は裏企画の内容を知っていたという事は、事前に練習をしておくことも可能なはずだ。

「え……し、してないですよー？」

松本はしれーっと目を逸らした。

(こいつ……絶対、練習してやがる)

続編 ・チケットは二度彼女の手が届く 2・

午後6時、『合同ボーリング大会』スタート。

総勢33名で5レーンを貸し切り、くじ引きで前半17人と後半16人に分かれ、

さらに3、4人ずつのグループに分かれてやる事になっている。

俺は後半のグループで今回はあの三人組とも一緒にならずに済んだ。

しかし、千莉ちゃんとはというと前半のグループで、しかも松本と一緒にだった。

(あのヤロー……くじになんか仕込んでたんじゃねえだろうなー?)

後半組の俺達は前半組がゲームをしている間、後ろのソファで待機する事になった。

「前園さん、今日は本気でいくんですか？」

煙草を吹かしながら後ろから千莉ちゃんと松本の様子を眺めていると、

俺の隣に林田が腰掛けた。

千莉ちゃんと同期で同じ総務部の男だ。

「まあな、どうせやるなら本気でやらないと面白くないだろ?」

「そうですね」

「てか、林田も『デート権』狙ってるんだろ?」

「もちろん」

林田はそう言つと挑戦的な笑みを俺に向けた。

(む……)

挑発してんのか？

上等じゃねえかー。

それから間もなくして前半組のゲームが開始された。

千莉ちゃんとの『デート権』はこの『合同ボーリング大会』に参加した

男性社員のほぼ全員が狙っていると思われた。

一部の男性社員は女の子と楽しそうにきゃあきゃあ言いながら投げているものの、

それ以外の男共は目がマジだ。

その中でも俺と林田の視線はある男に向けられていた。

「おい……あれ……」

俺は目を疑った。

「……………」

そして林田も言葉を失った。

「松本のヤツ……………」

「……………」

「下手クソだなー」

松本はいきなりガターを出した後、立て続けにまたガター。

ピンに当たっても倒れるのはせいぜい端の2、3本。

間違ってもヘッドピンになんて当たらない。

だからストライクなんてもってのほか、スペアーも取れないでいた。

「酷いですね」

「てか、あいつ昨日練習しに行ったんじゃないのか？」

「え……あれで？」

「だってそんな感じだったぞ？」

「まあ、でもこれで松本は争奪戦からあっさり脱落って事で」

林田はそう言うと他の男性社員を偵察し始めた。

千莉ちゃんはあまり力がないのかボールが真っ直ぐにヘッドピンに当たるものの、

なかなかストライクが出ない。

スペアーを取る事もあるけれどスプリットになったり、ガターになったり。

それでもゲームが終わる頃、なんとか100近いスコアを出していた。

そして前半組のゲームが終わった。

松本は……千莉ちゃんよりも低い点だった。

他の奴らはどうと、だいたい120点前後、高くて150点くらい。

これならまだまだ望みはある。

前半組と後半組が入れ替わり、後半組の男性社員は俺を含め11人。

その中には林田ともう一人の幹事・佐々木もいる。

俺の右隣のレーンに佐々木のグループ、左隣のレーンに林田のグループが入った。

(千莉ちゃんの『デート権』は絶対俺が死守するっ！)

(千莉ちゃんっ！ 14日は『ロイヤルディナークルーズ』で食事デートだよっ！)

くるりと後ろのソファーにいる千莉ちゃんを振り返ると、  
ちやっかり松本が千莉ちゃんの隣に座って何か話していた。

「……」

(まっっもっとおっっ)

「前園さん、何番がいいですか？」

俺が松本を睨みつけていると同じグループになった西川さんが  
いつの間にか俺の目の前に立っていた。

「え？ あー、何番でもいいよ」

「じゃあ、最後で」

「OK」

俺のグループは西川さんの他に総務部の男性社員で俺の一つ先輩の

高木さんが一緒だった。

最近、結婚したばかりの新婚さん。

だから争奪戦には参加しないだろう。

……油断はできないが……。

続編 ・ チケットは二度彼女の手が届く 3 ・

「佐々木も下手だなー」

右隣のレーンにいる佐々木達が一足先にゲームを始めた。

それを見ていた高木さんがプっと吹き出した。

(確かに……)

佐々木も松本同様、いきなりガターを出していた。

松本も佐々木も去年入社したばかりの新人。

「最近の若いモンは……」じゃないけれど、あまりボーリングをした事がない世代なのか、

それとも二人ともただコントロールが悪いただけなのか。

どのみち俺様の敵ではない事だけは判明した。

だが、林田はというと第1フレームの第一投目でいきなりストライクを出しやがった。

(む、やるな)

「前園さんの番ですよー」

「あー、はいはい」

西川さんに呼ばれて立ち上がると視界の端に千莉ちゃんが見えた。

あんまりガン見するとなんかいろいろとバレそうだったから、

顔の向きは変えずに横目でちらり。

千莉ちゃんもこっちを見ているみたいだ。

頑張らねば。

ボーリングは結構ハマっていた時期もあったからよくやっていた。

調子が良ければ150くらいはいける……かな？

俺が投げたボールは真っ直ぐにヘッドピンに当たった。

「よっし！……て、あらっ？」

しかし、運悪く7番と10番のピンが残り、いきなりスプリット。

（パワー不足だったか？）

「あー、惜しいねー」

「でもこれ頑張ればスペアー取れますよ」

そう言ってくれた高木さんと西川さんにつんつんと頷きながらイスに座ると、

林田と目が合った。

（なんかちょっと余裕かましてねーか？）

そしてその林田の第二投目はなんと……っ！

ガター。

（えーっ？）

手元が狂ったのか？

次は俺の第二投目。

7番ピンの左側を狙うか、10番ピンの右側を狙うか……

（右だな）

特に根拠はない。

“迷ったときは右”

理由は実に簡単、俺は右利きだから。

コントロールが重要だから少し抑え気味に投げた。

するとボールは見事10番ピンの右側を掠め、7番ピンに向かって  
弾き飛んだ。

スペアーだ。

高木さんと西川さんにハイタッチをすると、林田が微妙な顔をして  
いた。

完全に俺の事をライバル視しているみたいだ。

その後も林田はストライクを出したかと思えば、ガターを連発したり上手いのか下手なのかよくわからないが第9フレームが終わった時には

148点というスコアを叩き出していた。

一方、俺のスコアは155点。

高木さんと西川さんが投げている間、ちらちらと他のグループの男性社員のスコアを見てみたが、最終フレームの第一投目あたりで  
だいたい120点前後だった。

となると、いよいよ俺と林田の一騎打ち、最後の第10フレームが勝負だ。

ここで林田がストライクかスペアーを出したら厄介な事になる。

そして問題の最終フレーム。

林田の第一投目。

(ガター出せー)

ひたすら心の中で念じながら林田に“呪いの視線”を送った。  
すると、俺の呪詛が効いたのか林田は見事にガターを出した。

(よっしやーっ！)

心の中でガッツポーズ。

まだ勝負はわかんねえけど。

で、俺の第一投目。

小さく息を吐き出して投げたボールはヘッドピンの右へ僅かにずれ、  
またも7番と10番のピンが残り、残念なスプリットとなった。

「ぐはあ……っ」

林田のガターを喜んでいる場合じゃなかった。

(マズい、次で絶対スペアーを取らないと)

林田は俺をちらりと見て立ち上がった。

でも、その顔に余裕はない。

ここで確実にスペアー……つまり、第一投目がガターだったから  
絶対にストライクを出さないと勝負がついてしまうからだ。

林田が投げたボールは勢い良くヘッドピンめがけて転がっていき、  
全てのピンを弾き飛ばした。

(な、何いー！っ！?)

意外とこいつは“やる時はやる”男なのかもしれない。

「「前園さあくん！ 頑張つてえっ！」「」

第二投目の前に集中しようとしていると、あの三人組の声が聞こえた。

気がつくと俺と林田のグループ以外はすでにゲームが終わっていた。  
高木さんと西川さんが座っているすぐ後ろを例の三人組が陣取り、  
きやあきやあ言っている。

おかげでさっきまで見えていた千莉ちゃんの姿がまったく見えなくなっていた。

「……………」

（邪魔だなあー）

そして、いまいち集中しきれないまま第二投目。

ボールは10番ピンの右側に当たった。

しかし7番ピンには当たらず、ピンセッターの奥へと倒れた。

「……………」

スペアーにならなかったショックで声すら出ない。

という訳で俺のスコアは164点で終わった。

後は林田が6本以上倒さなければ俺の勝ちだ。

しかし、6本倒すと同点になる。

その場合はどうなるんだ？

祈るように……いや、呪うように林田の第三投目を注視しているよ、

“やる時はやる”男がはまたしてもやりやがった。

乾いた音を響かせて倒れたピンの数は……

7本。

林田のスコアは165点になり、同時にヤツの優勝と千莉ちゃんとの

『デート権』獲得が決まった。

続編 ・ チケットは二度彼女の手が届く 4 ・

『合同ボーリング大会』が終わった後は近くの居酒屋に移動して打ち上げ。

「えー、それでは皆さん、お疲れ様でしたー！ かんぱーい！」

幹事の松本くんの音頭で乾杯した後、

「それでは、これより『男性の部』と『女性の部』の上位三名の発表を行います」

もう一人の幹事・佐々木くんから成績発表と賞品の授与があった。

『男性の部』の三位は総務部の長谷川部長、『女性の部』は私。賞品はビール券。

「じゃあ、長谷川部長と高本さん、並んで下さい」

佐々木くんに言われ、記念のツーショット写真。

「高本さん、表情硬いなあー、笑って笑ってー」

デジカメを構えた佐々木くんは全然笑っていない私に「ハイ、1足す1は1？」と言い、

「2」と、私と長谷川部長が答えたところでシャッターを切った。

「次ー、二位の発表行きまーす！」

佐々木くんは記念撮影を終えると、さっさと二位の発表に移った。

『男性の部』の二位は一夜さん、『女性の部』はあの例の三人組の一人、鈴木さんだ。

一夜さんはかなり真剣にゲームをしていたみたいだから優勝できなかったのが悔しいのか、

なんとなく不機嫌そうな顔をしていた。

ちなみに二位の賞品はお米券。

「前園さん、鈴木さん並んでくださーい」

佐々木くんがそう言っていると鈴木さんは一夜さんにぴったりとくっついた。

(何あれー？ くっつき過ぎじゃない？)

「……」

正直、ムカツと来た。

一夜さんもやや眉間に皺を寄せている。

佐々木くんがデジカメのシャッターを押して

「ハイ、もういいですよー」と言った後も鈴木さんは一夜さんからなかなか離れなかった。

そして最後に一位の発表。

『男性の部』は林田くん、『女性の部』は西川さん。

一位の賞品はなぜか『男性の部』と『女性の部』で違っていた。

『男性の部』は『ロイヤルディナークルーズ』のペアチケット、

『女性の部』は『東京デイズニールゾート』の一日ペアパスポートだった。

(なんで一位だけ男性と女性で違うんだろ?)

その答えはすぐにわかった。

一位の記念撮影が終わった後、私の隣の席に林田くんが来て

「高本さん、松本か佐々木のどっちかから何か預からなかった?」  
と言った。

「うん、預かったよ?」

それは昨日の事、昼休憩が終わってデスクに戻ると白い封筒とメモが置いてあった。

.....

預かっておいてください。

佐々木

.....

私はきつと何かの書類か何かだろうと、あまり深く考えないで引き出しにしまった。

「それ、一位の賞品の『ロイヤルディナークルーズ』のペアチケットだから。」

「14日に一緒に行こう」

「えっ？」

(うそっ)

「あ、ちなみに出港時間は確か19:00ですから」

佐々木くんはそう言うと、

「いやあ、高本さんとデート出来るなんて林田さんが羨ましいです」

私と林田くんのグラスにビールをトポトポと注いだ。

「でも、俺、一位は絶対前園さんだと思ってたよ。」

最後の最後でまさか逆転できるとは思わなかった」

林田くんは一夜さんを横目にご機嫌顔でビールを飲み、グラスを空けた。

「しかも一点差ですもんねー」

佐々木くんは林田くんのグラスにまたビールを注ぎ、

「実は今回の裏企画で経理部と総務部の男性社員が選んだ女性社員の人気No.1と

ホワイトデー限定の『ロイヤルディナークルーズ』でデートをする権利を賭けてたんです」

と、ネタばらしをした。

(じゃあ、一夜さんがあんなに真剣にやってたのは……)

一夜さんに視線を向けるとまたあの例の三人組に囲まれていた。

(バレンタインのチョコ、受け取って貰えなくてへこんでたから

一夜さんの事、諦めたのかと思ってたのになぁー)

それがまた何もなかったように三人ぴったり一夜さんにくっついて飲んでる。

(……て、もう酔ってる?)

鈴木さん達は少し赤い顔で楽しそうに一夜さんに“絡んで”いた。

さすがに一夜さんはまだ酔っていないみたいだけど今日はお酒のピッチが早いのか

一夜さん達のテーブルには明らかに他のテーブルよりもビール瓶が並んでいた。

続編 ・チケットは二度彼女の手に届く 5 ・

午後10時30分。

打ち上げがお開きになり、お店から出るといつの間にか

一夜さんとあの三人組の姿が消えていた。

(一緒に帰っちゃったのかな?)

それとなく一夜さんを捜していると林田くんが傍に来た。

「高本さん、送っていくよ」

「あ、ううん、大丈夫」

「でも、こんな遅い時間に一人じゃ危ないよ?」

「え……と、ちょっと寄りたい所があるから……」

一夜さんはもしかしたら賢さんのお店に行っているかもしれない。

「今から？」

「う、うん」

「じゃあ、そこまで送っていくよ」

「ううん、ホントに大丈夫だから……それじゃ、おやすみなさいっ」

あそこは一夜さんの隠れ家みたいな所だから他の人に知られるのはマズい。

私は林田くんから逃げるように踵を返した。

賢さんのお店に向かう途中、一夜さんの携帯を鳴らしてみただけれど

散々コール音が鳴った後、留守番電話に切り替わった。

( 出ない…… )

「くんばんはー」

賢さんのお店に入ると、すぐに賢さんの顔が見えた。

「いぶっしゃい」

「一夜さん、来てます?」

一夜さんはいつもカウンターの席に座る。

でも、カウンターに彼の姿はなかった。

「ん？ 来てないけど？ 待ち合わせ？」

「あ、いえー、約束はしてないんですけど、もしかしたら来てるかなー？ って」

「携帯には電話してみた？」

「はい、でも出ないんですよ」

「そう。じゃあ、とりあえず何か飲みながら待ってる？」

「はい」

……で、待つ事一時間。

「一夜さんはまったくもって来る気配すらない。」

「おかしいなあー、なんで出ないんだろ?」

賢さんも一夜さんの携帯に掛けてみたらしく眉根を寄せた。

「もう帰って寝てるのかも」

「えー、千莉ちゃんを置いて?」

「うーん、今日は結構飲んでたみたいですし、他にも女の子がいたから送って帰ったのかも」

「まったく……同じ酒の席で飲んでたにも拘らず彼女を放っておいて他の女と帰るなんて」

賢さんはなんだか私より怒っていた。

翌朝、ロッカールームに入るとあの三人組がいた。

「うえ〜、気持ち悪い〜っ」

「最悪……」

「休めばよかったー……」

ポカリスエットやミネラルウォーターを片手に辛そうな顔をしている。

「どうやら二日酔いみたいだ。」

「ねえ、昨日前園さん、いつの間に帰ったの？」

「えー、知らない。気がついていたらいなかったよねえ？」

「うんうん」

制服に着替えながら聞こえてきた会話を何気なく聞いていると一夜さんの事を話していた。

彼女達がこんな会話をしているという事は、昨夜は一緒に帰った訳ではなさそうだ。

打ち上げの時、一夜さんがあちこちの席に移動してもずっとくっついて回っていたから

帰りも一緒だったのかと思っていたけれど、まんまと撒かれたらしい。

(じゃあ、一人で帰って酔い潰れて寝ちゃったのかな?)

デスクに座ってパソコンの電源を入れながら一夜さんの方をちらちらと窺うと

いつも通りの顔で仕事をしていた。

(あれ? 昨夜は結構お酒を飲んでいたはずなのに)

不思議に思いながらメールボックスを開くと、林田くんからメールが来ていた。

.....

おはよう。

明日のディナークルーズの事なんだけど、

18:00に浜松町駅北口で待ってるから。

チケット持って来てね。

.....

(あ………そういえば)

一夜さんの事で頭がいっぱいですっかり忘れていた。

(.....)

( ああ……………情けない…………… )

自分がこんなにもダメ男だったとは。

昨日の『合同ボーリング大会』で優勝出来ず、あっさり林田に

千莉ちゃんとの『デート権』を奪われてしまった。

しかも一点差で。

そしてよりもよってそのデートはホワイトデー限定の

『ロイヤルディナークルーズ』だ。

さらには打ち上げの席でも完全に出遅れた俺は例の三人組に捕まっただけでなく、

千莉ちゃんの近くに行く事もままならなかった。

やけくそ気味に酒を飲み、酔い潰れたあげく一体どうやって帰ったのか……………

気がつけば自分の部屋のベッドで寝ていた。

止めは目が覚めて二日酔いで重い体を無理矢理起こしてシャワーを浴び、

酒を抜いていざ出勤しようとして携帯がない事に気が付いた。

(あれ?)

携帯はいつもベッドのサイドテーブルに置いている。

しかし、どこにもない。

煙草やサイフ、部屋の鍵はちゃんと置いてあるのに携帯だけがない。

もしかやと思い、キッチンやリビングも捜してみたがやはりなかった。

みちるに俺の携帯を鳴らして貰ったが着信音がどこからも聞こえてこない。

(まさか、落とした?)

自棄酒のおかげですっかり記憶がない。

そんな訳で俺は朝から落ち込んでいた。

そして昼休憩の直前、俺のデスクの内線電話が鳴った。

「はい、経理部です」

『受付ですけど、今、前園さんの妹さんがこちらにいらっしやうてるんですけど』

(みちるが？ 何かあったのかな？)

「わかりました。すぐに行きます」

受話器を置いて受付に行くと、エントランスホールのソファアーにみちるが座っていた。

「どづしたんだ？」

「どづしたじゃないよ。携帯、持って来てあげたの」

みちるはバッグの中から俺の携帯を出した。

「え？ どこにあった？」

今朝あれだけ捜しても見つからなかったのに。

「タクシー会社の人が昨夜乗せたお客様が車内に忘れて行ったみた

いだって

モバイルショップに届けてくれたみたい。

それで10時くらいに家の方にモバイルショップからこちらで預かってますからって

電話があってね、今、私に取りに行つて来たの」

「マジで?」

「お兄ちゃん、きっと携帯なくて困つてると思つて

「おー、さすが我が妹!」

「わざわざ届けに来たんだから感謝してよねー?」

みちるはそう言つと手を腰に当てて胸を張つた。

「ありがとう、感謝してるよ。お礼に昼飯奢るから」

「ホント？」

「ああ、ちょうど昼休憩になったし。何が食べたい？」

「じゃあ、パスタ！」

「え……もうちょっと豪華なモンにしるよ」

「んー……、じゃあー……」

みちるは少し考えると、

「やっぱり、パスタッ」とにんまり笑って答えた。

「はは、わかったよ」

我が妹ながら安くつく女だな……と思った。

俺とみちるは会社の近くのパスタ専門店に入った。

「ねえ、お兄ちゃん、昨夜なんかあったの？」

みちるは美味しそうにカルボナーラを食べながら言った。

「ん？　なんでだ？」

「ものすごく酔ってたから」

「大人にはいろいろあるんだよ」

「ふーん」

そしてみちるは一緒にランチセットのサラダを口に運び、

大きな口を開けて「あ」と、小さく言った。

「お兄ちゃん、あれ……」

「うん？」

みちるが指差した方を見るとうちの会社の制服を来た女の子と  
スーツ姿の男が向き合って座っていた。

（千莉ちゃん？）

女の子の方は千莉ちゃんだった。

（男は誰だ？）

千莉ちゃんの向かい側に座っているスーツ姿の男に目をやると  
そいつは俺もよく知っているヤツだった。

林田だ。

「あの野郎……」

「お兄ちゃん、あの男の人誰？」

みちるは小声で俺に尋ねた。

「千莉ちゃんと同期でしかも同じ総務部の林田って奴」

「へえ、なかなかイケメンじゃん」

「……」

まあ、確かに林田はフツのそのへんの奴よりは顔はいい。

「ところで前から思ってたんだけどさー、千莉さんてなんで

お兄ちゃんなんかと付き合ってたの？」

「俺なんかとって、おまえ……」

(酷い……妹なんだから、もうちょっと言い方ってモンを考えてく  
れてもよくねえか?)

「だって千莉さんほど美人なら、わざわざお兄ちゃんみたいな年上  
じゃなくても

今一緒にいる人みたいに同期の人とかもっと若い彼氏がいてもお  
かしくないのに」

「う……」

そりゃあ、千莉ちゃんからしてみれば俺は六歳も年上だし、

“おっさん”なのかもしれない。

俺はそれ以上、何も言えなかった。

続編 ・チケットは二度彼女の手が届く 7・

RR、RR、RR……

みちるとパスタ専門店の前で別れ、会社に戻って自分のデスクに座ると

賢から携帯に電話が掛かってきた。

「はい、もしもし?」

『……やっと出た』

何やらちよっと怒りが籠っていきそうな賢の声。

『おまえ、昨夜打ち上げの後、何してた?』

「あ?」

『千莉ちゃん、俺の店でおまえの事ずっと待ってたんだぞ?』

「えっ!？」

昨夜は打ち上げの途中から記憶がなくなった。

まさか、千莉ちゃんが賢の店で俺を待っていたとは……。

「……彼女、怒ってた？」

『それはもうー、メチャメチャ怒ってたぞー？』

携帯にも電話したのに、おまえ全然出ねえし』

「え、マジで？」

『千莉ちゃんに嫌われても知らないぞー？ いや、てゆーか……』

もう嫌われてたりして?』

「……」

(ま、まさか)

『愛想尽かされた挙句、他の男に獲られたりしてー？』

「……」

(そういえば、さつき林田と……)

“わざわざお兄ちゃんみたいな年上じゃなくても今一緒にいる人み  
たいに

同期の人とかもつと若い彼氏がいてもおかしくないのに”

みちるが言った言葉が頭を過ぎった。

まさか、まさか、まさか？

まさかの乗り換えか？

と、そこへ千莉ちゃんと林田がデスクに戻ってきた。

「せ……た、高本さんっ、ちよ、ちよ、ちよっと来てっ」

まずい、まずい、まずいぞ、これは……！

「あ、あのっ、前園さん？」

突然、腕を掴まれた千莉ちゃんは半分俺に引き摺られるように歩いた。

「き、緊急ミーティングッ」

「えっ？ な、何のですか？」

「りよ、領収書の事」

「領収書？」

「いいから、とにかく来てっ」

「えっ？ えっ？ えーっ？」

訳がわからない事を口走りながら俺は千莉ちゃんをミーティングルームに連れ込んだ。

「千莉ちゃん、ごめんっ」

「あ、あの……」

「ホッントに、申し訳ない！」

「前園さん、どうしたんですか？」

千莉ちゃんは余程怒っているのか敬語だし、しかも“一夜さん”て呼んでくれない。

「やっぱり……怒ってるよね？」

「何がですか？」

「いや、だから昨夜の事」

「昨夜？」

「賢の店でずっと待ってたって……」

「あー、その事ですか」

「だから、ごめん」

「私が勝手に待ってただけですし」

「怒ってないの？」

「はい」

「……………」

(だって、さっき賢がメチャメチャ怒ってたって……)

「でも、怒ってる事なら一つだけあります」

「な、何？」

「昨日の裏企画の事です。知ってたんなら“そんなの断れ”って  
どうしてハッキリ言ってくれなかったんですか？」

「……………」

(そうか……そもそも最初から千莉ちゃんにそう言えばよかったのか)

だいたい俺が優勝出来るかどうかなんてわからないだし、

千莉ちゃんは俺の“彼女”だ。

俺がビシッと“断れ”って言わなくてどうするんだ？

『おい、こっちの事、忘れてねえかー？』

不意に手に持っていた携帯から賢の声が微かに聞こえた。

「あ……」

(そういえば、まだ電話繋がったままだった)

「おい、賢！ どういう事だよっ！」

『いやあー、なかなかおもしろい会話を聞かせてもらったよ』

賢は今の会話を全部聞いていたようだ。

からかう様にクツクツと携帯の向こうで笑っている。

「おまえ……」

『千莉ちゃんが怒ってたっていうのは嘘だよ。』

寧ろおまえの事、心配してたぞ』

「なんで？」

『かなり飲んでたみたいだから、ちゃんと帰れたかなあー？ って。』

ホントにあんない彼女、しっかり捕まえてないと俺が奪つぞ？』

(何っ!?)

「バカッ、そうはさせるかっ」

『ははは、まあーとにかく千莉ちゃんの事、大事にしるよ？  
んじ  
やな』

賢はゲラゲラと笑いながら電話を切った。

続編 ・ チケットは二度彼女の手が届く 8 ・

「ところで、千莉ちゃん……て、あら？」

賢に電話を切られ、気がつくのと千莉ちゃんは既に

ミーティングルームからいなくなっていた。

(うう……冷たい……)

.....

さっき、林田と何話してたの？

.....

とりあえず俺もデスクに戻ったものの、一番肝心な事が解決出来ていないと思い、

千莉ちゃんに社内メールを送った。

- - - - -

## 明日の事

- - - - -

しばらくして短い返事がきた。

(忙しいのかな?)

千莉ちゃんの方を見ると真剣モードでパソコンに向かっていた。

それでも一応、送ってみる。

- - - - -

明日の林田とのデート断って

.....

すると、またしばらくして返事が来た。

.....

もう遅い

.....

(え……)

昼休憩、林田と話していた時に断れない状況になってしまったのだ  
ろうか？

(それとも、やっぱり相当怒ってる?)

再び千莉ちゃんの方を窺うと相変わらず忙しそうに仕事をしている。

だからこれ以上の話は仕事が終わってからする事にした。

- - - - -

今夜、賢の店で待つてる。

何時になってもいいから来て。

- - - - -

「前園さん、ちょっといいですか？」

メールを送って、画面が切り替わったところで総務部の佐々木が来た。

後一秒コイツが来るのが早かったら俺が千莉ちゃんにメールを送っていたのが

バレるところだった。

あぶない、あぶない。

「あー、昨日の裏企画の事なんですけどー……」

佐々木は他の人に聞こえないように小声で話し始めた。

「うん？」

「一位と二位の賞品を交換して貰えないかなー？ っていう相談なんですけど……」

「へ？」

「いや、それがですねー……ここだけの話なんですけど、

実は高本さんが『人気投票で選んで貰ったのはとても光栄な事なんですけど、

こういうのは林田くんが一番誘いたい人を誘ってあげて？』って、

昼休憩の時、林田さんにチケットを返したらしいんですよ。

もちろん、林田さんは高本さんが一番誘いたかったって言うたら

しいんですけど、

高本さんに『今、お付き合いしてる人がいるから、こういう“デート”だと

誤解されるような事はできない』って、はっきり言われたらしいんです」

(……え)

「それで、林田さんから高本さん以外誘いたい人もいないから、

このチケットは二位の前園さんに渡してくれって言われて……、

けど、それだと林田さんが何にもなくなっちゃうから、

幹事としては二位のお米券と交換して貰えたら助かるんですけど……」

「うん、全然OK、OK牧場！」

なんだ、なんだそんな事ならモーマントイ！

千莉ちゃんも結構意地悪だなあー？

さっきはあんなつれないメールを返してきておいて、

林田をバツサリ斬り捨てちゃってるんだから。

“もう遅い”っていうのは俺が言う前に断ったという意味か。

チケットとお米券を交換した後、林田の方にちらりと視線を向けると  
背中が哀愁に満ち溢れていた。

(うわ……)

俺のデスクからは背中しか見えないけど、林田の落ち込んだ顔が想像できた。

そして、夜。

「千莉ちゃん、明日コレ一緒に行こう?」

俺は彼女の目の前に『ロイヤルディナークルーズ』のチケットが入った

白い封筒を置いた。

「えっ、これって……」

見覚えのある封筒を手にし、中から出てきたチケットに千莉ちゃんは驚いた。

「何故か俺の手元に回ってきちゃった」

「な、なんで?」

「千莉ちゃんが林田の事をぶった切ったからー」

「……林田くんから聞いたの？」

「いや、佐々木に聞いた。林田がさ、千莉ちゃん以外に誘いたい人なんていないから、」

「二位の俺にこのチケットを渡してくれって佐々木に言ったんだってさ」

「そ、そうなんだ……」

「俺と一緒に行ってくれる？」

「それって……裏企画の延長？」

千莉ちゃんはちょっと意地悪な言い方で俺の顔を上目遣いに見た。

「そんなワケないだろ？ 俺は一番誘いたい人を誘ってるんだから」

俺がきっぱりそう言つと

「うんっ」

彼女は嬉しそうに返事をした。

続編 ・チケットは二度彼女の手が届く 8・(後書き)

これにて続編完結です。

ありがとうございました。 m ( ) m

続編・予約済み・1

明日から五月、今夜も賢の店で千莉ちゃんとデートの真っ最中。

「えっ！？ 結婚っ？」

賢の素っ頓狂な声がカウンター席に響いた。

「とっとう、おまえも身を固める決心をしたか」

「こら、早まるな。俺と千莉ちゃんじゃなくて、経理部にいる女の子の話だから」

五月いっぱいうちの経理部の西川さんが寿退社をする。

その事を千莉ちゃんに話していると、傍らで話を聞き齧っていた賢が早とちりをしたのだ。

「なあんだ……おまえと千莉ちゃんじゃないのかー」

残念そうに言う賢。

俺としては彼女と結婚する気は満々なのだが……当のご本人、千莉ちゃんは

可愛らしい笑みを浮かべてクスクス笑っている。

千莉ちゃん的にはどうなんだろう？

翌日、五月一日。

月初めのフロアミーティングで西川さんが今月末をもって結婚退職する事が告げられ、

後任の派遣社員の女性が紹介された。

「……………っ!？」

俺はその派遣社員の女性の顔を見た途端、驚きの余り息が止まった。

(冴子……………っ)

それは、四年前まで俺と付き合っていた一つ年上の女性・水沢冴子みずさわ さえこだった。

「水沢冴子です。宜しくお願いします」

彼女は俺の顔を見ても顔色一つ変えず、にこやかな顔で挨拶をした。とりあえず俺も平静を装う。

“水沢”は彼女の旧姓。

一人っ子の冴子は婿養子を取ったから結婚をしても苗字が変わらなかったのだ。

フロアミーティングが終わり、俺の目の前の西川さんのデスクでさっそく引き継ぎが始まった。

「水沢さん、四年前はどこ部署だったんですか？」

デスクに並んで座ると、西川さんが冴子に訊ねた。

「人事部よ」

彼女が笑みを浮かべて答えた通り、冴子は四年前までうちの会社の人事部にいた。

俺とは所謂、社内恋愛というヤツだった。

しかし、俺と別れた直後に冴子は会社を辞めて結婚をした。

「ずっと人事部だったんですか？」

「最初、総務に三年いて、その後はずっと人事にいたの」

「じゃあ、知ってる方も大勢いるから気が楽ですね」

「ふふ、そうね。特に一夜とはね？」

冴子はそう言うという意味深な笑みを浮かべながら俺に視線を移した。

「え……前園さんと水沢さんて、親しかったんですか？」

冴子が“一夜”と呼んだ事で西川さんが不思議そうな顔をした。

「水沢さんは俺の一年先輩だからね」

とりあえずそう答えておく。

「……そうですか」

だが、西川さんは『それだけじゃないですよね？』という顔をしている。

それはそうだろう。

(つーか、冴子のヤツ……一体、何を考えているんだ？

俺達が付き合っていた事がバレたら、自分だって居辛くなるのに  
……)

午後五時過ぎ。

誰もいない休憩室でコーヒーを飲んでいると、

「久しぶり」

後ろから冴子が近付いて来た。

「……」

振り向かなくても声でわかる。

「ね、今夜食事でも一緒にどう？」

冴子はそう言いながら俺の隣に腰を下ろした。

「……」

「二人だけで」

「無理」

「冷たい」

「忙しいんだ」

「少しくらい、いいじゃない？ それとも……彼女でもいるの？」

「ああ……今、付き合ってる子がいる。彼女に誤解されるような事はしたくないんだ」

「だけど、真剣に付き合ってる訳じゃないんでしょ？ 聞いているわよ？ あなたの噂はいろいろと。」

なのに、そんな綺麗事……」

そう言って軽く笑う冴子。

「俺は真剣だ。おまえの時よりもな」

「……」

やや顔を顰める冴子。

だが、

「ごめんね、定時前になって資料作成なんか頼んで」

「ううん、そんなの気にしないで？」

林田と千莉ちゃんの二人が話しながら休憩室に入って来た。

それで冴子も平静を装う。

「「お疲れ様です」「

千莉ちゃんと林田が俺と冴子の姿を認めて口を開く。

「お疲れ様」

俺が千莉ちゃんに笑みを向けながら言うと、千莉ちゃんは少しだけ表情を崩した。

「…………お疲れ様です」

冴子もなんでもない顔で言う。

コーヒーをとつくに飲み終えていた俺は千莉ちゃんと林田の事が気になったが、

とりあえずその場を後にした。

冴子もその後、すぐに戻って来て引き継ぎの続きを始めた。

千莉ちゃんも休憩室の自販機でコーヒーを買った後、林田と共にすぐにデスクに戻って来た。

（林田の後頭部が邪魔なんだよなー）

林田は千莉ちゃんの真向かいの席。

だが、俺の席も千莉ちゃんとちょうど向き合う位置だ。

だから俺の席からだと目の前の西川さんとその向こうにいる林田が邪魔で彼女の顔がよく見えないのだ。

美人系の西川さんはともかく、林田は長身で体もデカイから余計にムカつくのだ。

しかも、西川さんが退社した後は冴子が俺の目の前に座る。

俺が顔を上げる度に冴子の顔と林田の後頭部……。

ああ……休憩室に行く回数が増えそうだ。

そして定時になり、

「今日は初日だし、引き継ぎはここまでにして、もう帰っていいよ」

朝から引き継ぎをしていた冴子に経理部の伊藤部長が声を掛けた。

「そうですね、水沢さん、お家で旦那さんとお子さんが待っていますもんね？」

西川さんが手を止める。

しかし……、

「主人と子供の事は気にしなくていいの。義母に任せてるから」

冴子は顔を上げる事無く手を動かし続けていた。

「……………」

伊藤部長と西川さんが顔を見合わせる。

「あ、でも……………西川さんは旦那様になる方が待ってらっしゃるわね？ 結婚式の準備で忙しいでしょうし」

冴子は手を止めると作り笑顔を浮かべ、デスクの上を片付け始めた。

「お先に失礼しまーす」

それから間もなくして冴子と西川さんが退社。

(はぁ……………長い一日だった……………)

これがこの先ずっと続くのか……………。

そう思うとなんだか胃が痛くなってきた……。

数日後。

今日も朝から女子更衣室ではあらゆる噂話が飛び交っていた。

そんな中、

「おはようございます」

西川さんが入社して来ると、

「」「西川さん」「」

例の三人組が待ってましたと言わんばかりに彼女を取り囲んだ。

「な、何……っ?」

「西川さんは聞いてます?」

「前園さんと水沢さんの関係とか」

「水沢さんがどうして前園さんの事を“一夜”って呼び捨てにしてるか」

詰め寄る三人組。

（それ、私もずっと気になってたのよね……）

「昨日、水沢さんが一夜さんの事を“一夜”と呼んでいるのを偶然耳にした。

一瞬、聞き間違えたのかとも思ったけれど、昨日もそう呼んでいたのをハッキリ聞いたし、

彼女も以前この会社の別の部署にいたという噂を小耳に挟んでいたから、

きっとその頃からの知り合いなんだとは思っていた。

「……」

口を閉ざす西川さん。

「「「どうなんですかっ？」」」

更に詰め寄る三人。

「……私も人事部にいる先輩に聞いた話だから、よく知らないんだけど……」

「「「何ですかっ?」「」」

「あの二人……昔、付き合ってたんだって」

「「「ええっ!?!」「」」

(……)

なんとなく、そんな気はしていた。

「二人は二年くらい付き合ってたらしいんだけど……ある日突然、水沢さんが別の人と」

『出来ちゃった結婚』をして会社も辞めたらしいわ」

(……)

西川さんの話の内容に私はものすごくショックを受けた。

「その話が本当なら、普通、元彼のいる会社に派遣社員として来るかな？」

「でも、前園さんともかく、水沢さんは“一夜”って呼んでるし」

「じゃあ、もしかして……」

(……よりを戻すつもりなのかも?)

私だけじゃなく、ここにいる誰もがそう思っただろう。

「だけど、それなら前園さん、水沢さんに捨てられたって事？」

「それで女性が信じられなくなって、遊んでるとか？」

「じゃあ、なんで私達の誘いはいつも断るの？」

と、三人がそんな事を話していると、

「おはようございます」

噂の水沢さんが更衣室に入って来た。

「」「」「」

ピタリと会話を止める三人。

「おはようございます」

その横で西川さんがぎこちない笑みを浮かべて挨拶を返した。

「……………おはようございます」

とりあえず私も平静を装いながら挨拶をする。

「おはようございます」

水沢さんにはにっこり笑った。

“美人で知的でスタイル抜群”

そんな完璧な女性が一夜さんの元カノだなんて……。

一夜さんは、どうして私なんかと付き合う気になったんだろう？

そして、昼休憩の終わり、

(あ……)

部署に戻ろうと廊下を歩いてみると、目の前を一夜さんが歩いていった。

いつもより少しゆっくり歩いている。

何か考え事をしているみたいだ。

「一夜」

すると、私の後ろから水沢さんが一夜さんの姿を見つけて駆け寄って行った。

「……っ」

足を止める事無く振り返った一夜さんは、私と目が合つと一瞬、驚いて前に視線を戻した。

「ねえ、待ってよ」

少し足取りを早めた一夜さんの腕を取る水沢さん。

すぐに腕を振り払う一夜さん。

それでも、二人が並んだ姿を後ろから見ているとお似合いだなあー

って思った。

「今夜、時間ある？」

「ない」

彼の歩調に合わせながら小走りをしている水沢さんに、顔を向ける事無く答える一夜さん。

あの三人組と同じ扱いだ。

「じゃ、時間作ってよ」

「用件はなんだ？」

「ここで話せる事なら、わざわざ時間作ってなんて言わないわよ」

「……」

「いつなら空いてるの？」

「……」

「もうー、あの頃はあんなに優しく愛してくれたのに、今は随分冷たいのね？」

何も答えようとしない一夜さんを挑発するような言い方をした水沢さん。

その言葉が私の胸を締め付ける。

「おい、あんまりそういう事は社内で口にするなよっ」

一夜さんは鋭い口調で水沢さんを制した。

けれど、その事ではやはり西川さんが言っていた事は本当の話なんだと確信した。

それにあの三人組が話していた事も……。

( やっぱり、水沢さん、一夜さんと…… )

「時間を作ってくれないんなら、家に押しかけちゃおっかなー？」

「勝手にしろ」

突き放すように冷たく言い放った一夜さん。

「……………」

水沢さんは一旦足を止めて、一夜さんから離れると自分の歩調で歩き始めた。

デスクに戻った一夜さんは眉間に皺を寄せたままパソコンに向かった。

いつも笑顔の彼が水沢さんが来てからずっとこうだ。

(なんか……私の知っている一夜さんじゃないみたい)

その日の夕方。

冴子と西川さんが定時退社をした後、千莉ちゃんの方に顔を向けると、

目が合ったにも拘わらず、なんとなく彼女が視線を外した。

(え……)

いつもはそんな事ないのに。

だが、千莉ちゃんがそんな態度を取った理由に一つだけ心当たりがあった。

きつと昼間の“アレ”だ。

俺と冴子の後ろを歩いていた千莉ちゃんにもあのやり取りは聞こえていたはず。

それにおそらく昔、俺と冴子が付き合っていたという噂も耳にしているだろう。

(まずいな……何とかしないと)

かと言って冴子があんな調子じゃ、今は千莉ちゃんに何を言っても、どんな言葉を掛けても無駄な気がした。

「おいーす、いらっしやい」

賢の店に顔を出すといつも通りの笑顔で賢が迎えてくれた。

「ん？ おまえの方が先に来るなんて珍しいな？」

賢がそう言ったのは、いつも千莉ちゃんの方が先に来て待っているから。

「今日は千莉ちゃん、来ないよ」

そう、彼女は来ない。

さっきの彼女の様子で下手に会うよりも冴子の事が片付くまで俺から『会おう』とは言わない方がいいと思ったのだ。

だから“賢の店で待ってて”とは言えなかった。

「なんだ？ ケンカでもしたのか？」

「いや……ケンカじゃない」

「まさか、フラれたか？」

賢が軽く笑いながら言う。

「……………」

「……て、え……？ マジ？」

否定しない俺に賢が焦ったように言う。

「まだ辛うじてフラれてはないけど……このままじゃ俺、ヤバいかも……」

「どうしたんだ？」

「実はうちの部署の女の子が、今月末で寿退社をする事になったって言ってただろ？」

その後任として派遣社員の女性が今月の初めから来てるんだけど……」

「ぶんぶん？」

「それが……冴子だったんだ」

「え……まさか、おまえと付き合ってたあの冴子さん？」

冴子の事は賢も知っていた。

当時、賢もまだ店を持っていなくて、たまにダブルデートなんかをしていたから面識はあるのだ。

「そう、そのまさか……」

「嘘だろ……？」

「俺も最初は自分の目を疑ったよ……けど、冴子だった。

しかも、アイツ……なんか企んでるらしくて……今日の昼間、二人でいるところを

千莉ちゃんに見られちゃったんだ……それ以来、彼女の様子がおかしくなって……」

「おまえがそこまで落ち込んでるって事はもちろん、冴子さんと今更どうこうってのは考えてないんだろ？」

それなら早いうちに千莉ちゃんの誤解を解いておいた方がいいんじゃないか？」

「かと言って、冴子の目的も何もわかんねえし……」

「冴子さんからは何も言っ来ないのか？」

「話があるから時間を作ってくれとは言われてる」

「なら、その話を一度聞いてみたらどうだ？」

「……」

「『今更何を言われても……』って顔してるけど、おまえが冴子さんから逃げてる限り、

千莉ちゃんの誤解も解けないし、下手をしますとますます悪化する

ぞ？」

「ああ……わかってる……」

「まあ、わかってるから』このままじゃ俺、ヤバいかも』って言ったんだと思うけど。」

冴子さんの時のように千莉ちゃんを失いたくないなら、ちゃんとハッキリしろよ？」

「ああ……」

俺は賢の言葉を深く受け止めて頷いた。

だが、

事件はその翌日に起きた。

『もしもしっ、お兄ちゃん？　すぐに帰って来てっ』

定時が過ぎて冴子が退社した約一時間後、みちるがただならぬ様子で携帯に電話してきた。

「どうしたんだ？」

『なんかよくわかんないけど、女の人が勝手にうちに上がり込んで来ちゃったのっ』

「は？」

『私が帰ってくださって言うっても全然聞かないし、その上、料理まで始めちゃって……、』

包丁持つてるから怖くて……とにかく、お兄ちゃん、すぐに帰って来て!』

「わ、わかった」

それはすぐに冴子だと確信した。

昨日は『家に押しかける』とか言っていたけれど、俺は冴子と付き合っていた頃は

今とは違う場所に住んでいたから家がバレる事はないと思っていた。

しかし、今日になってバレたという事は、昨日なんらかの手段で突き止めたのだろう。

(くそ……っ)

「あら、おかえりなさい」

俺が家に戻ると涼しい顔の冴子がキッチンにいた。

みちるはというと、自分の部屋に籠ってドアを少しだけ開けて様子を窺っている。

「ちょうど今、出来たところよ」

「どづいづつもりだ？」

まさか、ここに冴子がいるなんて……。

「言ったでしょ？ 『家に押しかける』って。そうしたら一夜も『勝手にしろ』って言ったじゃない？」

「どづいづいで、ここがわかったんだ？」

「私が人事部だったのを忘れたの？ 人事部が管理している社員のデータベースを見れば一発でわかったわ。」

あの頃とパスワードが変わってなかったから簡単だった」

「……そうまでして、俺に一体、何の話があるって言うんだっ？」

「私、もう一度一夜とやり直したいの」

「ふざけるな！」

「ふざけてなんてないわ」

確かにふざけていたらこんな不法侵入まがいの事など正気で出来ないだろう。

「帰れ」

「一夜がちゃんと私の話を聞いてくれたらね」

「……こんな事までして、聞ける訳がないだろうっ？」

「でも、私は本気なのっ」

「だとしても、今は冷静には聞けない……とにかく、今夜は帰ってくれっ！」

「……わかった」

「それと、今度こんな事したら警察に突き出すからなっ」

「……っ」

俺がそう言つと冴子は顔を歪ませた後、静かに部屋を出て行った。

「お兄ちゃん、今の人、何っ？」

直後、みちるが自分の部屋から出て来た。

「……………」

「あの人……………」『もう一度やり直したい』って言ってたけど……………もしかして、昔付き合ってた人？」

「……………ああ」

「ねえ、お兄ちゃん……………前から訊きたかったんだけど……………」

「……………」

「このマンション買ったのって……今の人と……住むつもりだったから?」

「……ああ」

俺がこの部屋を買った理由、それは当時、冴子が俺のプロポーズを受けてくれた直後に

早まって購入したのだ。

「でも……別れた後、私が転がり込んできちやっただから……手放すに手放せなかった……とか?」

「まあ、正直に言えばそうだが……今はそれでよかったと思ってる。

だから、みちるが気にする事はないよ」

「……」

「それより……今日は外で食べよう」

「え……あの人が作った物は？」

冴子は味噌汁とサラダ、それにハンバーグを作っていた。

「おまえが食べられるなら食べていいけど……俺は無理」

「私だって……気持ち悪くて食べられないよ……」

「じゃあ、ポイだな」

「うん……」

「」「ごめんなさい」

俺とみちるは食べ物と粗末にする事に聊か罪悪感を感じながら、冴子が作った料理を

全て三角コーナーに捨てた。

続編・予約済み・4・

翌日。

俺は朝一で人事部に怒鳴り込んだ。

「浅沼っ！」

「おう、前園、どうしたんだ？」

「どうしたじゃねえよっ！ 人事部のデータベースの管理は一体、  
どうなっているんだっ？」

「へっ？」

「社員のデータベースのパスワードはどのくらいで変えているんだ  
っ？」

「そういえば……俺がここに配属されて以来一度も変わってないなあー」

「……」

浅沼が人事部に移ったのは、かれこれもう五年も前の事だ。

俺は呆れて声も出なかった。

「どうかしたのかあ〜？」

しかも、能天気な声で訊く浅沼に余計イラ立つ。

「どうかしたじゃねえっ！　今すぐ社員の個人情報データベースのパスワードを変更しろ！」

「っか、普通こつという重要なデータベースは定期的にパスワードを変えるだろっ！」

「前園くん？ どうしたんだ？」

俺が人事部に乗り込み、声を荒げていると人事部の石井部長が出て来た。

声が出た方に向くと、その部長のデスクの前に千莉ちゃんが立っていた。

おそらく何かの書類を届けに来たか、受け取りに来たのだろう。

「……」

千莉ちゃんは驚いた顔で俺を見つめていた。

「君がそんな風に取り乱すなんて珍しいな？」

至って冷静な石井部長。

「当たり前です。昨日、ある人物に不法侵入されたんですから」

「っ！？ どういう事だね？」

俺の言葉に流石に動揺する石井部長。

「……個人的な事なので詳しくは話せませんが、以前、人事部にいた人間が昨日、

社員のデータベースにアクセスして俺の住所を調べて家に押しかけて来たんですよ。

幸い家上がり込んで勝手に料理をしていただけで妹には危害はありませんでしたが……」

「料理をしていたって……女性か？」

「……はい」

俺は石井部長の問いに素直に頷いた。

「……まさか……いや、そうか……わかった。

パスワードは今すぐ変更して定期的にも変えるようにする。

データベースの管理も徹底させよう。

イントラだからと思って油断をしていたが……すまなかつたな」

「おい、料理してた女って……」

俺と冴子が付き合っていた事を知っている浅沼は怪訝な顔をした。

「お騒がせして申し訳ありませんでした。この事はどうか内密にお願いします」

「……」

冴子の名前を口にしようとした浅沼を遮るように俺が頭を下げると浅沼は言葉を飲み込んだ。

「いや、こちらこそ申し訳ない……この事は私と浅沼くんの胸の中だけに仕舞っておく。」

浅沼くんもいいな？ それと、パスワードの変更の件も頼むよ」

「は、はい、わかりました」

浅沼が頷くと、石井部長はデスクに戻って再び千莉ちゃんと話し始めた。

(マズイところを見られちゃったなー……)

そして、昼休憩。

「一夜、一緒にお昼食べない？ 話があるの」

冴子が誘ってきた。

(ここで断つたら次は何を仕掛けて来るかわかんないしな……)

「……今日だけだからな？」

俺がそう言っただけで立ち上がると、視界の端に千莉ちゃんの不安そうな顔が見えた。

対照的に笑みを浮かべる冴子。

「それで？ 話って？」

俺と冴子は会社の近くにある静かな喫茶店に入った。

「昨日のハンバーグどうだった？ 美味しかった？」

『話がある』と言っただけで冴子はそんな他愛もない事を話し始めた。

「一夜、ハンバーグ好きだったでしょ？ だから頑張っ……」

「話はなんだ？」

冴子の言葉を遮るように言うと、彼女が顔を歪ませた。

「……昨日言った事、私は本気よ」

「だとしても無理だ」

「あなたの恋人には私から手切れ金でもなんでも渡すから」

「そうじゃない。たとえ俺に恋人がいなくても俺にそんな気はないし、」

おまえだって結婚しているだろ？」

「離婚するわ」

「本気で言ってるのか？」

「本気よ、そう言ってるじゃない」

その言葉のとおり、確かに冴子は真剣な顔をしていた。

「……旦那さんはともかく、子供はどうするんだ？」

「あなたが嫌なら……主人に引き取ってもらおうわ」

「子供が可愛くないのか？」

「……」

無言になったという事は、子供を手放すのは辛いという事か。

「……俺とおまえは、もう終わってるんだ。」

おまえが今の旦那さんを選んだ時から……それに、俺は今、失いたくない女性がいる」

「でも、その人が私と同じ様に一人っ子だとしたら？」

私の時と同じ様に両方の親から反対されたらどうするの？

あの時と違う決断が出来るとあなたは言える？」

「ああ、言える。反対されたなら解決策を探せばいい。

跡取りの問題だと言つなら、みちるに婿を取ってもらつか、

子供を二人以上作ってどちらかを養子にするっていう手だってある」

「なら……どうしてあの時にそう言ってくれなかったの？」

「あの時は……みちるはまだ高校生で、いきなり『おまえに婿を取ってもらつ』なんて話は

出来なかつたし……知らない家じゃないにしても、子供が生まれる前からそんな簡単に

養子に出すなんて事も言えなかった……」

「……そういえば、あなたってそういう人だったわね……大事な時にいつも優柔不断だった」

ふっと溜め息を吐く冴子。

「おまえは俺のそういうところが嫌になったから、俺じゃなくて旦那さんの方を選んだんだろ？」

「……」

「とにかく、おまえとの関係はもう終わってるんだ」

俺はそう言つと、冴子を残して立ち去った。

昼休憩が終わる頃、

私がデスクに戻ると経理部の内線電話が鳴っていた。

西川さんのデスクだ。

しかし、まだ西川さん本人も水沢さんも休憩から戻って来ていないし、経理部は誰も戻って来ていなかった。

「はい、経理部です」

私は電話を転送して応対した。

「受付です。ロビーに水沢さんのご主人がお見えになっ  
ているのですが……」

「そうですか。水沢さん、まだ席に戻られていないんですが、すぐ  
に戻ると思いますので伝えておきます」

『わかりました。では、このままお待ち頂きますので宜しくお願  
いします』

「はい」

そう言っ  
て私が受話器を置くと同時に一夜さんが一人で席に戻って  
来た。

（あれ？ 水沢さん、お化粧直してるのかな？）

「前園さん」

「うん？」

「あの……水沢さんは「一緒じゃ……」？」

「あ、ああ……えっと……」

「夜さんは私が個人的に訊いているんだと勘違いしているらしく、口籠った。」

「今、受付からロビーに水沢さんの旦那さんがお見えになってるって内線で連絡があったんですけど……」

「あ、ああ……そう……て、俺、途中でばっくれたからわかんないな。」

「けど、後五分で休憩終わるし、もうすぐ戻って来ると思うよ?」

「そうですか」

（ずっと一緒じゃなかったんだ……）

私は心の中で少しホッとした。

「内線受けてくれてありがとうね」

「あ、いえ……」

と、そこへ……、

「あ、戻って来た」

一夜さんがドアの方に視線を向けた。

すると、経理部の男性社員数人と一緒に水沢さんが少し沈んだ表情で戻って来た。

(一夜さんと何かあったのかな……?)

そう思いながら、とりあえず受付からの伝言を伝える。

「あの、水沢さん、ロビーに旦那さんがお見えになってるそうです」

「え……」

伝言を聞いた彼女は顔を顰めた。

「お待ち頂いてるそうなんです……」

「……」

「水沢さん？」

俯いた彼女の顔を覗き込む。

「……会いたくない」

すると、水沢さんが小さな声で咳くように言った。

「「え？」」

私と一夜さんの声が重なる。

「会いたくないの」

「でも……」

「会いたくないって言うてるでしょっ？」

私が口を開きかけたその時、水沢さんが鋭い視線を私に向けた。

「おい、会いたくないのはおまえの勝手だが、何も彼女に当たる事はないだろっ？」

すると今度は一夜さんが鋭い口調で水沢さんを制した。

フロア内の空気が一瞬で凍りつく。

そして、水沢さんが逃げるように踵を返したその時

「あ……」

ドアが開いて経理部の伊藤部長と一緒に三十代半ばくらいの男性が部署に入ってきて来た。

その人物の姿を目にした途端、水沢さんは足を止めた。

「ああ、水沢さん、戻っていて良かった。受付の子からロビーで主人が待っているって聞いてね、

もうそろそろ君も戻る頃だろうと思ってお連れしたんだ」

伊藤部長が連れて来たのは水沢さんの旦那さんのようだ。

だけど、その旦那さんは水沢さんよりも先に一夜さんに詰め寄った。

「……………っ、貴様っ！」

(え……………?)

「おまえが冴子の恋人だったのはわかっているんだ！」

冴子の事が忘れられないからって、何も今になって妻を誘惑する事はないだろうっ?」

そう言っつて一夜さんの胸倉に掴み掛かる。

「冗談じゃありません」

一夜さんは掴み掛かって来た旦那さんの手を振り解くと、ネクタイを直しながら口を開いた。

「俺が冴子に手を出していると思っっているようですけど、その逆です。」

それに俺には今、真剣に交際している女性がいます。

今回の事でもその女性にも不安な思いをさせて、寧ろこっちが迷惑している方なんですから」

(一夜さん……)

冷静で、でも怒りが込められた口調の彼の言葉に私は驚いた。

「……本当なのか？ 冴子」

旦那さんが水沢さんの方に振り返る。

「……」

だけど彼女は返事もせず俯いていた。

「冴子！」

「……」

「冴子、帰ってちゃんと話そう」

次々と社員達がデスクに戻って来る中、注目的になり始め、旦那さんが水沢さんの腕を掴んだ。

「嫌よ、放してっ」

「冴子っ」

「……水沢さん、今日は帰りなさい」

すると、しばらく様子を見ていた伊藤部長が口を開いた。

「ご主人がわざわざ会社に来るなんて余程の事だ。帰って二人でちゃんと話し合いなさい」

「……はい」

水沢さんは小さな声で返事をした。

「」迷惑をお掛けして申し訳ありません」

旦那さんは伊藤部長に一礼すると水沢さんと一緒に部署を出て行った。

そうして、私が席に戻ってしばらくすると社内メールが届いた。

.....

俺の所為でいろいろ嫌な思いをさせてごめんね。

不安にさせてるのもわかってる。

全てが片付いたらちゃんと話すから、それまで待ってて。

- - - - -

一夜さんからだった。

彼の方に視線を向けると、一夜さんもこちらを見ていた。

少しの間見つめ合う。

すると、一夜さんの表情がほんの少しだけ柔らかくなった。  
。

翌朝。

「……え、水沢さん、辞めちゃったんですか？」

経理部の朝礼で冴子が辞めた事が知らされ、西川さんが気の抜けた声を出した。

「ご主人と話し合って決めたそうだ……それにしても、前園くんと水沢さんが付き合っていたなんて

全然知らなかったなあ」

と、伊藤部長。

(知ってて冴子を経理部に配属したんだとしたら、相当な鬼だぞ……)

「あの……それで後任の人はどうなっちゃうんでしょう？」

「その事なんだが、今大至急捜して貰っているから、すまないがまた一から引き継ぎを頼むよ」

西川さんの質問に苦笑しながら答える伊藤部長。

(冴子が辞めたという事は、とりあえずは一件落着……かな?)

そして、朝礼が終わると

「前園くん、次の後任の子もまた元カノだったらすぐに言ってくれよ?」

伊藤部長が俺に耳打ちをした。

「は、はあ……」

(そんな偶然有り得ねえっーの……)

その日の夕方、

「前園くん、ちょっと一緒に来てくれ」

定時を過ぎた頃、伊藤部長に言われた。

「はい」

何かと思いながら席を立ってついて行くと、

「下に水沢さんがご夫婦で見えているらしい」

と、小声で言った。

部長と共に一階ロビーの横にある応接室に入ると、冴子と冴子の旦那さんが待っていた。

「この度は大変申し訳ありませんでした」

俺と伊藤部長に二人揃って深々と頭を下げると、

「主人ともよく話し合いました」

冴子が落ち着いた様子で話し始めた。

「前園さんにも大変なご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。

息子を置いて冴子が突然家を出て行ってしまった後、水沢の両親に相談したら、

おそらくあなたの所じゃないかと言われまして……それで興信所に調べさせたら

恋人だったあなたの会社に派遣社員として働いてて、おまけにあなたのマンションに

買い物袋を提げて入っていく写真を見せられて……、

それで、つい勘違いを……本当に申し訳ありませんでした……」

旦那さんの方も“俺が冴子を誘惑した”という誤解が解けたらしく、  
ばつが悪そうに言つと、

改めて頭を下げた。

「いえ……、それよりお子さんを置いて出て行つたって……一体、  
どうしてそんな……？」

「実はお恥ずかしい話……私は次男という事で水沢家には婿養子で  
入ったのですが……、

私の結婚と同時に兄夫婦がちょうど実家に戻る事になりました母  
の事は全て任せたんです。

ところが、一年前、母が『兄嫁とはどうしても反りが合わない』  
と私達夫婦の所に転がり込んで来た上、

冴子に家事のやり方だけでなく、子育ての事にまで口を挟み始め  
て……、

おまけに水沢の両親からは『私達とは別居しているのに……』と  
言われまして……。

冴子が相当なストレスを抱えていたのに、私は忙しさを理由にち  
やんと話を聞かなくて……、

それで耐え切れなくなつて離婚を覚悟で出て行つたんです」

「嫁姑問題”か……どこも同じだな」

それを聞いた伊藤部長が軽く溜め息を吐いた。

どうやら部長の家庭にも“嫁姑問題”があるらしい。

「ですが、それも全て解決しました。

母には兄夫婦の所へ追い帰さない代わりに、二度と冴子に口出しはしないように約束させましたし、

水沢の両親にもちゃんと話して了解も得ました」

「これからは主人もちゃんと話を聞いてくれると約束してくれましたし」

そう言つて穏やかな笑みを浮かべた冴子。

その瞬間、目の前に並んで座っている二人がものすごく“お似合いの夫婦”に見えた。

( やっぱり、冴子は俺じゃなくてこの旦那さんと結婚してよかったんだ )

冴子達夫婦が帰って、席に戻った俺はすぐに千莉ちゃんにメールを送った。

- - - - -

さっき、冴子と旦那さんが来た。

全て解決したから。

今夜、会いたい。

賢の店で待ってて？

- - - - -

パソコンに向かっていた千莉ちゃんはすぐに社内メールが来た事に気が付いた。

- - - - -

うん、私も会いたい

- - - - -

彼女のレスに俺は驚いた。

“うん、私も会いたい”

(千莉ちゃんも俺と同じ気持ちなんだ )

そう思うと今すぐにでも彼女を抱きしめたくてその衝動を抑えるのに俺は必死だった。

賢の店には俺の方が早く着いた。

……と言うのも、早く彼女に会いたかった俺は早々に仕事を切り上げた。

だが、千莉ちゃんの方はまだ少し仕事が残っていたようだった。

「お、いらっしやい」

賢のその声で振り向かなくても千莉ちゃんが来たのだとわかる。

「ご、ごめんなさい、遅くなって……待ちました？」

焦った様子で俺の隣に腰を下ろす千莉ちゃん。

「いや、全然、そんなに慌てなくても大丈夫だよ？」

優しくそう言うと彼女はホッとしたように笑みを浮かべた。

「一夜も少し前に来たばかりだよ」

賢は笑いながら千莉ちゃんの目の前に冷たい水が入ったグラスを置いた。

「今日の本日のスープは『アスパラガスのポターージュ』だよ。

ちなみにセツトは『カボチャのリゾット』と『春キャベツと鰹のマリネ』」

「じゃあ、セツトで」

俺と千莉ちゃんは同時に口を開いた。

「りょーかい」

賢はにっこり笑みを浮かべるとカウンターの奥で調理を始めた。

「忙しかった？」

「んー、少しだけ。一夜さんは早かったんですね？」

千莉ちゃんは“一夜さん”と呼んでくれているにも拘わらず敬語だった。

（まだ、完全に誤解が解けてなくて心を開いていないって事かな…  
…？）

「俺も忙しかったよ、それなりにね。でも……、千莉ちゃんに早く会いたかったから」

そんなベタなセリフを言うと、

「万事解決したみたいだな？」

賢がスープを温めながら言った。

「ああ、全部解決したよ」

「まあ、おまえが店に入って来た時からわかってた。顔つきがこの

間と全然違ってたからな」

「水沢さん、辞めたって聞きましたけど……本当ですか？」

千莉ちゃんが不安そうな顔で言う。

「うん、昨日、あれから旦那さんともよく話し合ったらしくてやり直す事にしたって。」

冴子……彼女も苦しかったんだと思う……。

婿養子を貰って、義理の母親の面倒も旦那さんの兄夫婦が見ていたから同居していなかったし、

自分の両親ともいずれば同居するにしてもまだ面倒を見なくちゃいけない程じゃないし、

子供は可愛いし、亭主元気で留守がいいってね。

だけど、一年前に義理の母親が『兄嫁と合わない』って突然転がり込んで来たらしいんだ」

「うあ……そりゃ『嫁姑戦争勃発』間違いないね……ほい、まずはスープ」

賢は苦笑いしながら俺と千莉ちゃんの前に『アスパラガスのポター  
ジユ』を置いた。

「その通り。で、冴子に家事のやり方だけじゃなくて子育てにまで  
口出しするようになったんだってさ」

「家事はともかく、子供の育て方にまで口を出して欲しくないって  
いうお嫁さんは多いですもんね？」

千莉ちゃんはそう言いながらスプーンを取った。

「そうそう、だからその愚痴を旦那さんに聞いて貰いたかったみた  
いなんだけど、」

冴子の旦那さんて開業医でさ、忙しい人なんだよ」

「それじゃあ、ストレスが溜まる一方ですね？」

「うん……それで、とうとう離婚するつもりで子供を置いて出て行

「ただだつてさ」

「子供まで置いて……って事は実家には戻らなかったのか？」

『春キャベツと鰹のマリネ』を盛り付けながら不思議そうな顔をする賢。

「多分、ホテルかウィークリーマンションにでも泊まってたんじゃないか？」

「……それで？ 冴子さんの目的ってなんだつただ？」

賢は千莉ちゃんをちらりと一瞥した後、俺と千莉ちゃんの前にマリネを並べた。

「……」

隣から千莉ちゃんの視線を感じる。

「……俺とよりを戻したかつただつてさ」

「やっぱり、そうだったか」

……と、軽く言った賢とは対照的に千莉ちゃんは黙ったままだった。

「でも、ハッキリ嫌だって言った。俺には今、大切な人がいるから  
ってね」

俺がそう言つとハッと千莉ちゃんが顔を上げた。

「俺が千莉ちゃんを捨てて、冴子とよりを戻すんでも思った？」

「……」

「……てっ、何も言ってくれないって事はそう思ってたって事かよ  
っ？」

「だ、だって……」

「千莉ちゃん、コイツね、この間一人でここに来た時、超しょぼく  
れた顔してたんだよ？」

冴子さんにフラれた時よりもな、ほい、リゾートお待たせ」

賢が意地悪そうな顔でリゾートを俺と千莉ちゃんの目の前に置く。

「け、賢っ」

「だって、ホントの事だろ？」

「じ、自分じゃどんな顔してたか、わかんねえから返事のしようが  
ないな」

俺がそう言って慌てて賢から視線を外すと隣で千莉ちゃんが笑い始  
めた。

「一夜さんのこんな表情初めて見ました」

「もう、千莉ちゃんまで……」

とか言っつて拗ねてみるけれど、本当はやっと千莉ちゃんの笑顔が見られてホッとした。

「でも、昨日人事部に怒鳴り込んだ時の顔も初めて見ましたけど」  
さらにクスクス笑う千莉ちゃん。

「何？ その人事部に怒鳴り込んだっての」

賢が興味深そうな顔を向ける。

「この間、俺がここへ来た次の日の夕方、冴子が俺のマンションに押しかけて来たんだ。」

みちるから連絡があつて、飛んで帰って見たら上がり込んで料理してた」

「水沢さん、有言実行したのね……」

千莉ちゃんが顔を引き攣らせる。

やはりあの時の廊下での会話が聞こえていたらしい。

「アイツと付き合ってた時、俺は別の所に住んでいたから来る訳ないと思って高をくくってたんだけど、

ホントに押しかけて来たからどこで住所を調べたんだ？ っていうたら、

人事部の社員データベースにアクセスしたって。

冴子が人事部にいた時からパスワードが変わってなかったから簡単だったって言ったから、

その次の日に朝一で俺が人事部に『データベースの管理がなつてねえっ！』って怒鳴り込んだんだ。

そしたら、そこになぜか千莉ちゃんもいてさ……て、なんでいたの？」

「あれは、今度人事部に新しく来られる方の社員証を作る為に書類を書いて貰ったんですけど、

不備があつて修正をお願いしていたんです」

「あー、なるほどね」

(千莉ちゃんがデスクにいるのを確認してから怒鳴り込めばよかった……)

「でも……一夜さんのマンションに押し掛けて行ってまでよりを戻そうとしたわりに、

水沢さん、随分あっさり旦那さんとやり直す事にしたんですね？」

「……俺を試したのかもしれない？ 社内では人目もあるから冷たくしているけれど、

実際、家まで押し掛けて行ったらどうするか？ とかね」

「それで……一夜さんは、どうしたんですか？」

「もちろん、冴子を即刻追い出した。アイツが作った料理も食べなかった」

「……」

「“完全拒否”した訳だ」

賢が別のオーダーを作りながら言う。

「そ」

（だから、アイツも旦那さんと……いや、一番は子供の為に家に戻  
っただろうな）

「千莉ちゃん、今夜泊まってもいい？」

賢さんのお店をいつもより早めに出ると、一夜さんが珍しくそんな事を言った。

一夜さんは週末、私の部屋に泊まる事が多くなった。

切欠はホワイトデーのプレゼントだと言ってシングルサイズだった私のベッドをダブルベッドに買い換えてくれた事だ。

その時はなんだかとっても“してやられた感”でいっぱいだったけれど、今はそれでよかったと思っっている。

しかし、今日はまだ水曜日だ。

「うん、大丈夫だけど、みちるちゃんとケンカでもしたの？」

「違うよ。俺が千莉ちゃんと一緒にいただけ」

優しい口調でそんな事を耳元に囁かれ、思わず顔が赤くなった。

一夜さんは私の部屋に入るなり、玄関のドアに鍵を掛けて私の腰を強く引き寄せた。

「一夜さん……？」

「ごめん……もう、我慢出来ない……」

そう言って私の肩を抱いて顔を埋めた一夜さん。

「ずっと、こんな風に千莉に触れたくて……だけど、冴子の事がちやんと解決しない限り、

感情だけで千莉に触れたりなんかしたらきつと傷付けるだけだと思っ……出来なかった。

「ただ、千莉が俺の事を嫌いになったら……どうしようかと思っ  
てて……」

「そんな……私の方こそ、一夜さんが……また……」

「一夜さんに抱きしめられた瞬間、」

「今まで我慢してた感情やさっきまで残っていた少しの不安が一気に  
涙と一緒に溢れ出した。」

「千莉……ごめん」

「より一層強く私を抱きしめる一夜さん。」

「そのまま彼の唇が私の唇と重なる。」

「私はその後、彼に抱きかかえられてベッドへ運ばれた。」

一頻り愛し合った後、

「……ねえ、一夜さん」

「うん？」

「……水沢さんとは……どうして別れたの……？」

私は一夜さんの口からちゃんと聞きたくて思い切って訊ねてみた。

「……俺が冴子にプロポーズして結婚が決まって……彼女のご両親に挨拶に行った時に

『冴子は一人っ子だから婿養子になってくれ』って言われたんだ……だけど、俺も長男だし、

すぐには返事出来ないって言って、俺の両親に相談したんだけど、当然両親は大反対した。

でも、冴子のご両親も『嫁には出せない』の一点張りで……そして、冴子のヤツ、

『駆け落ちしよう』なんて言い出した。

だけど俺はそれじゃあ、なんの解決にもならないって反対をしたんだ。

そしたら今度は冴子のヤツ、先に子供を作ろうって言った。

でも、俺はそれにも反対をした。

周りに祝福されない結婚なんて……絶対に幸せになれないと思ったから……。

そしたら、冴子のご両親が今の旦那さんと冴子を無理矢理見合いをさせて、

相手が冴子をとても気に入ったって事もあつてすぐに縁談が纏まった。

冴子は俺にその縁談を止めて貰いたかったみたいんだけど……俺には出来なかった。

今の旦那さんはね、大きな病院の次男で旦那さん自身も開業医をしている優秀な人なんだ。

それで、そのうち、冴子が妊娠して“出来ちゃった結婚”っていう形ではあつたけれど、

二人はそのまま結婚した……。

冴子は優柔不断だった俺に嫌気がさしたんだと思う。

でも……今は俺はそれで良かったと思ってる……だって、こうして千莉と一緒にいられるから……」

「一夜さん……」

「そりゃあ、さすがにね、冴子にフラれた後は荒れたよ？」

「だけど、それがあから今の千莉との時間が……幸せがあるんだと思う」

「私との時間が幸せ……？」

「そう……俺、冴子は今の旦那さんと結婚して良かったと思ってる。

負け犬の遠吠えみたいに聞こえるかもしれないけど……今日、二人の姿を見てそう思った……。

今はあの時、冴子にフラれて良かったんだって心の底から思える」

「……そか……あのね、もう一つ訊いてもいい……？」

「うん、何？」

「あの、ね……前から思ってたんだけど、一夜さんてどうして普段は私の事、“千莉ちゃん”て呼ぶの？」

ベッドの中では……“千莉”って呼んでくれるのに……」

私はずっと抱いていた疑問を口にした。

「だって……“千莉”って呼ぶ度に俺の気持ちがどんどん膨らんで  
いって抑えられなくなってる……、

先走る気がするから……今よりも、もっともっと千莉にがつつく  
気がするから……。

でも、そうしたら千莉に嫌われる気がするし……」

「私……一夜さんの事、好きよ？ だから……」

「それって、がつついても平気って事？」

「え、と……その“がつつく”って……？」

「こんな風に突然、千莉の部屋に押しかけて抱いたりしてもいいの？」

「一夜さんに真っ直ぐに見つめられ、動けなくなった。」

「でも、私は恐怖を感じていた訳ではない。」

「一夜さん……今までずっと我慢してたの？」

「実は、結構……」

苦笑いを浮かべる一夜さん。

「……我慢、しないで？」

「千莉……」

「水沢さんの時と同じ様に……」

「それは、無理」

「……っ」

一夜さんの言葉に私の胸がズキンと痛んだ。

(やっぱり…… 一夜さんの中にはまだ……)

しかし、

「だって……俺は冴子の時よりも真剣なんだ」

(え……っ?)

私は思わず一夜さんの顔を見上げた。

「冴子と同じ様になんて出来ない……だって、それ以上に千莉を愛しているから……」

すると、真剣な目で彼が見つめ返してきた。

「だから、“千莉ちゃん”て呼ぶ事で自分を抑えてるんだ。求め過ぎて嫌われないように……」

「……そんなの、気にしなくていいのに……」

「抑えなくていいって事？」

「んじ」

「……後悔しても知らないよ？」

「後悔なんてしない……だって……私も一夜さんの事、愛しているから……」

「挑発してるの？」

「え……っ？　そ、そんな、挑発なんて……っ」

「嘘だよ……」

「一夜さんはそう言つとそつと私の唇にキスを落とした。」

翌朝。

「高本さん」

経理部の伊藤部長に呼ばれ、顔を上げると部長とその少し後ろに一人の女性が立っていた。

「今日から西川さんの後任で来てくれる事になった、派遣の相伴さん」

「大伴です。よろし……千莉っ？」

「……佐緒里っ」

伊藤部長の紹介で私の目の前に現れたのは、かつての親友・大伴佐緒里だった。

以前、私が付き合っていた彼・遠野隆也とおの たかやが二股を掛けていた相手だ。彼女とはその時以来、一切連絡を取っていないかった。それがこうして、また私の前に現れるなんて。

「高本さん、大伴さんと知り合いだったの？」

「は、はい、高校の同級生です」

「そうか、それなら部は違うけど大伴さんにいろいろ教えてあげくれ。」

それと、彼女に臨時社員用のセキュリティカードを貸し出してあげて欲しいんだが」

「はい、わかりました」

私はキャビネットの鍵を開け、臨時社員用のセキュリティカードを一枚取り出して佐緒里に渡した。

「ありがとう、これから宜しくね」

佐緒里はあの頃とまったく変わらない笑みを私に向けた。

こんな風に接する事が出来るって事は、きっと隆也との事を私が知らないかと思っっているのだろう。

「千莉と大伴さんで知り合いだったの？」

その日の夜、賢さんのお店で一夜さんにも伊藤部長と同じ事を訊かれた。

「……高校の時に付き合ってた彼が二股を掛けてた相手の女の子」

私がそう言つと、一夜さんが驚いた顔で固まった。

「……………それって……………、クリスマスにツリーの下でバッテリー会ったあの彼？」

「うん……………」

「そっか……………朝礼が終わった後に伊藤部長に『今回は元カノじゃないだろうね？』って耳打ちされて、

そんな偶然、そうそうある訳ないだろうって思ったけど……………こういうパターンの偶然もあるのか……………」

「だけど、佐緒里の方は私が何も知らないと思ってるみたい」

「だから千莉に対してあんな風に親しそうに接するのか……………」

「……………」

私はまた佐緒里に一夜さんを取られてしまっんじゃないかって不安になった。

「千莉？」

すると、不意に一夜さんに顔を覗き込まれた。

「どうしたの？」

私を優しく見つめる一夜さん。

「……ううん、なんでもない」

私がそう答えると一夜さんは柔らかい笑みを浮かべた。

私は一夜さんの隣にずっといたい、一夜さんとずっと一緒にいたい。

佐緒里に取られたくない。

翌日、昼休憩。

「前園さん、ここ空いてますよ、どうぞ」

佐緒里と一緒に社員食堂で昼食を摂っていると、一夜さんの姿を見つけた彼女が嬉しそうに声を掛けた。

「あ、ああ、うん」

特に断る理由もない一夜さんは、少し戸惑いながら返事をして私の隣に腰を下ろした。

「前園さんて、今彼女とかいるんですか？」

佐緒里の質問に一瞬、箸を止める。

「うん、いるよ」

笑顔で即答する一夜さん。

「もう長いんですか？」

「いや、まだ半年も経ってないくらいだよ」

「へえ〜」

佐緒里は何かを考えながら返事をする。

「千莉は？」

私に視線を移した。

「遠野さんとまだ付き合ってるんですよ？」

「……隆也とは、大学の時に別れた」

「そうなんだ？ それからは連絡とかは？ 会ったりしてないの？」

「……去年のクリスマスに偶然会ったけど……一言二言話しただけ。連絡も別れてからは全然ないし、私からもしてない」

「あんなに仲が良かったのに？」

「……」

「私、絶対二人は結婚すると思ってたけど？」

「……」

「昔の恋人話が酒の肴って言うのはよくあるけど、ご飯のおかず」

するのは珍しいね?」

私が黙っていると、一夜さんが苦笑いしながら言った。

すると、そこへ、

「ここ、いいかな?」

林田くんが来た。

「どござ」

佐緒里がにっこり笑って言う。

「大伴さん……だっけ? 高本さんとは高校の同級生なんだって?」

「はい」

「じゃあ、俺とも同い年だね。同じフロアにいるから知ってると思  
うけど総務部の林田です。」

高本さんとは同期なんだ。だから敬語なんか使ってくれなくていいよ」

そう言っつて佐緒里に自己紹介をした林田くん。

「千莉と同期で同じ部署つて事は仲もいいの？」

その流れで佐緒里は私の元彼話から別の話題に移った。

「うん、まあそれなりね」

「じゃ、社内で誰が千莉の事を狙ってるかとかも知ってたりして？」

佐緒里がにやりとしながら言う。

そういえば、彼女は昔からこういった話が“大好物”だった。

「そりゃあ、高本さんは社内で『恋人にしたいランキング』ナンバーワンだからね。」

ほとんどの男性社員が狙ってると思うよ？」

林田くんは笑いながら言うけれど……そんな事はないと思う。

それにだいたいその『恋人にしたいランキング』って何？

「実は俺も狙ってるけど、一度玉砕したしね？」

自虐的な笑みを私に向ける林田くん。

「は、林田くん……っ」

「え、何？ その話聞かせて？」

案の定、喰い付いてくる佐緒里。

「今年の三月に経理と総務合同で『ボーリング大会』があったんだけど、裏企画で一位の男性社員には

女性社員の人気ナンバーワンとホワイトデー限定の『ロイヤルデイナークルーズ』に招待っていうのがあったんだ。

で、女性社員の人気ナンバーワンはもちろん高本さんで男子の部

の優勝者が俺だったんだけど、

いざ、高本さんを『ロイヤルディナークルーズ』に誘ったら『恋人がいるから』ってあっさり断られたんだ」

「えー、もったいない。てか、千莉ってやっぱり彼氏いたんだ？」

「う、うん」

「今度紹介してよ」

「……そのうち」

本当は紹介なんてしたくないって思った。

だって、また隆也の時みたいに取られてしまいそうだから。

数日後の金曜日。

五月末日、本日をもって西川さんが退職。

その日の終業後は経理部と総務部で西川さんの送別会と大伴さんの歓迎会が行われる事になっていて、

みんな十八時三十分で仕事を切り上げた。

今日の会場は全国の銘酒が数多く置いてある料理も美味しい少し高級志向の居酒屋。

西川さんの希望だ。

「西川さん、今まで本当にお疲れ様でしたっ」

経理部の後輩・松本が西川さんに大きな花束と寄せ書きを、

「大伴さん、ようこそ我が経理部へっ」

そして、大伴さんに満面の笑みを向けた。

俺は西川さんや大伴さん、いつもの三人組に囲まれながら千莉の様子を気にしていた。

千莉の周りには相変わらず男共が群がってやがった。

特に林田。

ずっと、千莉の隣をキープしている。

だが、幸いにも俺の向かい側に林田、左斜め前に千莉が座っているから

この距離なら千莉と林田の会話が丸聞こえだ。

「高本さんで、最近なんか雰囲気変わったよね？」

と、千莉のグラスにビールを注ぐ林田。

「え？」

「表情が豊かになって雰囲気も柔らかくなってきた……それは彼氏の影響？」

林田の言うとおり、社内で無表情だった千莉は俺と付き合い始めて徐々に表情だけでなく雰囲気も変わってきた。

「……そうかも」

一瞬だけ俺に視線を移して恥ずかしそうに答える千莉。

「へえ？ ここまで高本さんを変えた彼氏ってどんな人なんだろう？  
会ってみたいかも」

そんな事を言いながら、林田はまだ一口程しか減っていない千莉のグラスにまたビールを注いだ。

（はーやーしーだー……千莉を潰す気かぁー？）

しばらくして、

「高本さんていつもあんまり飲まないし、ほとんどビールだけど日本酒は嫌い？」

そう言つてメニューを開く林田。

次は何をする気だ？

「『利き酒セット』っていつのがあるよ？」

少しゆっくりと瞬きをした千莉にメニューを見せた林田。

「これ全部当てたら、今度俺がいいお店に連れて行ってあげる」

誰がどう見ても口説いているように見える。

「は……」

「前園さあくん、私、酔っちゃったあ」

林田を止めようとしていると隣に座っている大伴さんが寄り掛かって来た。

( ああっ、もう！ やっかいだな！ )

そんな事を思っている間にも店員を呼んで『利き酒セット』をオーダーする林田。

「少し外の風に当たってくれば？」

俺がそう言つと、

「じゃあ、前園さんもついて来て〜」

大伴さんに腕を掴まれた。

「俺、トイレに行つて来るから」

そう言つてとりあえず掴まれていた腕を解放させる。

(さて……どうしようか?)

トイレの中でしばし考える。

このままでは千莉を林田から救い出せない上、俺も大伴さんと三人組に捕まったままだ。

千莉の意識がまだはっきりしているなら、俺が先に帰ると言えば何かピンと来て自分も帰ると言つかもしれない。

だが……、

「……」

非難していたトイレから戻った俺は絶句した。

千莉が林田に体を預けるようにして目を閉じていた。

『利き酒セット』だかなんだかをオーダーして林田が千莉に飲ませたらしく潰れたのだ。

(まずったなあ……もっと早く林田から離せばよかった……)

『後悔先に立たず』とはよく言ったもので、俺はどうして強引にでも千莉の隣に座らなかつたのか後悔した。

千莉は酒に弱いという訳ではないが、そんなに強い訳でもない。

だから、歓送迎会が終わって店を出る頃には誰かの支え無しでは歩けない程になっていた。

「林田！」

店を出て、二次会に行こうと騒ぐ大伴さんと例の総務部三人娘の腕を振り払った俺は、

タクシーを止めて千莉を乗せている林田に駆け寄った。

「前園さん、どうしたんですか？」

涼しい顔で言う林田。

（千莉を潰しておいて『どうした？』はねえだろっ）

「高本さんは俺が送って帰るよ」

そう言った直後、

「前園さあくん、もう帰るんですかあ〜？ だったら一緒に帰りましょ〜？」

大伴さんが追い掛けて来た。

「高本さんの事はご心配なく。俺が責任持って送りますから」

林田はそう言うが……、

「……高本さんの家、知ってるのか？」

俺は大伴さんを見無視して林田に訊ねた。

「……いえ、それは……」

「なら、高本さんがこんな状態なのに、どこへ連れて帰る気だ？」

千莉は歩くのもやつとの状態で林田の支えでタクシーに乗せられ、後部座席で完全に正体をなくしていた。

「前園さあくん、千莉なんかより私を送って帰って下さあいい」

大伴さんは俺の背後で相変わらずそんな事を言っている。

「俺は高本さんの家も知ってる。林田は大伴さんを送って帰ってくれ」

「でも……」

「家の場所を知らないんじゃない？ 送りようがないだろ？」

俺がそう言つと、林田は怪訝な顔をしながらタクシーを降りた。

「……」

さっきまで騒いでいた大伴さんが無言になり、何か気付いたんだと察した。

(つーか、酔ったフリをしてたのかよ……)

だいたいの予測はしていた。

大伴さんは酒も飲んでいたが途中、ウーロン茶なんかのソフトドリンクで調整していたのを

俺は目にしていたからそんなに酔っていないとわかっていた。

「高本さんとは方角が同じだし、前にどの辺りなのか聞いた事があるから」

言い訳程度にそんな事を言ってみるが林田と大伴さんの二人は完全に何か気付いたようだった。

「運転手さん、出してください」

俺は逃げるようにタクシーを発車させた。

「……………ん……………いたたた……………」

翌朝、カーテンの隙間から差し込む光で目が覚めた。

だけど頭がガンガンする。

完全に二日酔いだ。

「あれ……………?」

それに何かが私に密着している。

(あつたかい……………)

心地良い温かさ。

顔を動かして正体を確認する。

(一夜さんっ?)

私に密着していたのは一夜さんだった。

彼が両腕で私を抱きしめていたのだ。

(そういえば……昨夜、私どうやって帰って来たんだろう？ 一夜さんが連れて帰って来てくれたのかな？

……て、なんで私、こんな格好してんのっ？)

私は何故か服を脱いでベビードールになっていた。

一夜さんもTシャツとハーフパンツだ。

しかし、服が散乱していないという事は一夜さんは普通に着替えて、私の服も皺にならないように脱がせてくれたみたいだ。

「……………ん……………千莉……………？」

ベッドの中で私がワタワタしていると一夜さんが目を覚ました。

(あ……………起こしちゃった)

「おはよ  
」

「一夜さんはそう言っていると私のおでこに軽くキスをした。

「お、おはよう……あの……一夜さん？」

「うん？」

「昨夜……私の身に一体何が起こったんでしょう……？」

「やっぱり、覚えてないんだ？」

「一夜さんはクスツと笑った。

「いやあ、昨夜の千莉はすごかったなあー、部屋に入るなり俺に強引にキスした上に、

ベッドに連れ込んで今度は服を脱がせ始めちゃってさあー、

俺が素っ裸になったら自分もポンポン服を放り投げながら脱ぎ始

めっちゃって……、

後はそのまま俺は千莉にされるがままってヤツ？ もっぴっくり

「

「え……」

一夜さんの口から語られた事実に私は顔が青ざめた。

「……ていう展開を期待してたんだけどね」

「へ？」

寝起きの上、二日酔いの私は思考回路がまだ完全に起動しておらず、一夜さんが言っている事がよくわからなかった。

「千莉を連れて帰って着替えさせる為に服を脱がせたのはいいんだけどさー、起きた時にＴシャツとハーフパンツとかよりも

ベビードールのままの方が可愛くていいかなー？ と思ってね」

ニコニコして言いながらコットンケットを捲る一夜さん。

「きゃっ、だ、駄目っ」

慌ててコットンケットを引き寄せる。

「え、今更？ 散々俺とあんな事や、こーんな事してるのに？」  
意地悪そうな顔で私に覆いかぶさる一夜さん。

「う……、だ、だって……」

「確かにいつもは電気消してるから暗いしね。だから俺も昨夜はこぞとばかりにガン見しちゃった」

「えーっ」

「脱がせてる時もいつもなら恥ずかしそうな顔するけど、昨夜は流石に酔い潰れちゃってるから無反応じゃん？」

それはそれで可愛いかったんだけど、せつかくだから目に焼き付けておこうかと思って」

「い、一夜さあくん」

「またそんな艶かしい声なんか出しちゃって、もう、俺を挑発してるの?」

「え……ち、違うもんっ」

「ウソウソ　いくら恋人とはいえ、俺も流石に二日酔いの子には手を出さないよ」

「一夜さんはそう言つとベッドから出た。」

「はい」

そして冷たいお水を私に手渡してくれた。

「ありがとう」

「それ飲んだら先にシャワーを浴びておいで。ちょうど昼になるから外で食事しよう」

「うん……て、もうそんな時間？」

驚いて部屋の時計を見るとちょうど午前十一時になるところだった。

「二人共酒が入ってたから全然目が覚めなかったみたいだね」

「ううー……、二日酔いなんて大学の時以来かも……」

「どの辺りから記憶がなくなった？」

「んー……『利き酒セット』？ ていうのを林田くんに飲まされて

……すぐくらい、かな？」

「やっぱりなあ……千莉って基本的にビールなら結構飲めるんでしょ？」

「うん、でも日本酒はすぐに酔っちゃうみたい」

「だけど、もう少しで千莉、林田に“お持ち帰り”されるトコだったんだぞ？」

「え……」

「林田が千莉をタクシーに乗せるところに『俺が送って帰る』って言って回避したんだけどね」

苦笑いする一夜さん。

「……『じ』『じめんなぞ……』」

「いや、俺も近くの席にいたし、『利き酒セット』を林田がオーダーする時に止めればよかったと思ってるんだ。」

「まあ、林田も自分が潰しちゃったから責任を感じて送って帰ろうとしたんだと思うけどね」

「一夜さんはベッドに腰を掛けて私の頭を撫でてくれた。」

「けど……俺と千莉の事、林田と大伴さんに気付かれたかも」

「へ？」

「林田が千莉を送るって言った時、『高本さんの家の場所を知ってるのか？』って訊いたら、」

「やっぱり知らなかったらしくて、それなら『俺が送って帰る』って言ったんだ。」

「一応、『前にどの辺りか聞いた事があるから』って言い訳もしてみただけ、」

その時、大伴さんも傍にいて話を聞いてたから多分、気付いたと思う。

だから、もしかしたら休み明けに二人に何か訊かれるかも……ごめん」

「ど、どうして一夜さんが謝るの？ 私が酔い潰れちゃった所為なの？」

「でも、やっぱり他に回避する方法もなかった訳じゃないと思うし。

まあ、俺はバレても全然いいんだけどね」

「……」

私も別にバレてもいいと思っていた。

佐緒里が来るまでは。

「千莉はやっぱり知られたくない？」

そう言っつて私の顔を覗き込む一夜さん。

「……佐緒里にバレちゃうと……」

「また俺を取られちゃうんじゃないかって思ってる？」

「……」

「……て、否定しないのかっ」

「だ、だって……」

「まあ、気持ちはわかるけど……俺は元彼とは違うよ？」

「う、うん……でも……佐緒里、高校の時も『どうでもいい男子も人の物になると奪いたくなる』って、」

よく言ってたし、最近まで付き合ってた彼も元々同僚の彼だった  
らしくて……」

「要するに“略奪”が趣味なんだ？」

「そうみたい……その元彼は結局、同僚の子に奪い返されて居辛く  
なって会社を辞めたって言ってたから、

少しは懲りたのかもしれないけど……」

「懲りてないとしても俺は大丈夫」

そう言って優しく微笑む一夜さん。

だけど私にはかえってそれが苦しかった。

だって……、

隆也もそうだったから。

彼も佐緒里と浮気し始めたと思われる頃、こんな風にすごく優しく  
ったのを私は思い出したのだ。

週が明けた月曜日の昼休憩、

「ねえ、千莉の彼氏って前園さんなの？」

社員食堂の二人掛けテーブルでさっそく佐緒里の尋問が始まった。

「……………」

「違っの？」

私は素直に認めてしまうと、佐緒里が一夜さんを私から奪うのにより一層必死になるような気がして

ハッキリとは認めたくなかった。

「付き合っていないなら、私、アタックしちゃおっかな？」

( やっぱり…… )

「 ……そうよ、彼が私の恋人」

私は仕方なく白状した。

「ふうくん……でも、私、前園さんの事が好きになっちゃった」

しれっとした顔で言う佐緒里。

「 ……」

「ねえ、千莉、もし、彼が私を選んでも恨まないでね?」

そして、佐緒里は私へ“ 宣戦布告 ”をした。

その日の夕方、

定時を三十分程過ぎた頃、仕事を切り上げてみんなに挨拶をして部署を出ると、

林田くんが追い掛けて来た。

「高本さん、ちょっといい？」

「うん」

私がそう返事をすると、彼はあまり人目につかない廊下の隅に移動した。

「……あの……高本さんが付き合ってる人って……前園さん？」

佐緒里と同じ事を小声で訊ねてきた林田くん。

「……」

(やっぱりその事なんだ……)

「一夜さんから『二人に気付かれたかも』って聞いていたから佐緒里から訊かれる事も、」

林田くんから訊かれる事も予測はしていた。

けれど、やはり答え辛い。

「違うなら違うでいいんだ……だけど……」

……と、林田くんが何かを言い掛けたその時、

「どうして私達が経理部に来たお客様のお茶を入れなくちゃいけないのよー！」

「そうよ！ 総務部の私達に押し付けないでよ！」

「それに私達も帰るところなんだから！」

例の三人組の声が廊下に響いてこちらに向かって歩いて来ていた。

その先頭には佐緒里がいる。

私と林田くんは思わず顔を見合わせた。

「君達、何を騒いでいるんだ？　ここはお客様も通る場所なんだぞ？」

慌てて林田くんが三人組に駆け寄る。

私もその後が続いた。

「だって、大伴さんが……」

「経理部に来たお客様なのに、『お茶くみは業務内容に含まれていないから』って……」

「私達に押し付けるんですよー？」

そう林田くんに訴える三人組。

その横を「お疲れ様」と佐緒里が涼しい顔で通り過ぎて行った。

「……ちよつと、大伴さんっ」

三人が同時に佐緒里を呼び止める。

しかし、彼女が足を止める事はなかった。

「お茶は私が淹れるからいいよ。」

お客様が何人なのか、経理部の人は何人なのか聞いてる？」

「お客様は二人で経理部の人二人だそうです」

「ミーティングルームでいいのかな？」

「はい」

私が三人組に訊くと、一応そういった事はしっかり聞いていたよう  
で三人組のリーダー格の鈴木さんが答えた。

コン、コン、

「失礼致します」

四人分のお茶を淹れてミーティングルームのドアを開けると伊藤部長と一緒に一夜さんもいた。

伊藤部長と一夜さんはつい先程退社したはずの、しかも経理部ではない私がお茶を持って来た事で

一瞬驚いた表情を浮かべた。

(一夜さんがいるとは思わなかった)

しかし、一夜さんも『部長代理』という肩書きを持っているから重要なお客様の場合、

伊藤部長と共に応対する事も珍しくはない。

実際、伊藤部長が忙しい時等は一夜さんが応対もしているから。

翌朝。

「高本さん、昨日はすまなかったね」

経理部の伊藤部長が朝一で私の席へやって来た。

昨日のお茶くみの件だ。

「いえ、気にしないで下さい」

「派遣の契約書に『その他雑務』って書いておいたはずなんですが…  
…本人は『来客応対』とは書いてないから、

お茶くみは含まれないなんて言うんだ……やはり派遣を使うのは

難しいのかねえ？」

小声で少し愚痴っぽく言った伊藤部長。

「佐緒里は前の会社で『その他雑務』っていう口実で散々都合よく使われてた派遣の子を

目にしているみたいですから、余計に線引きしておきたいんだと思います」

実際、佐緒里からそんな話は聞いていた。

「なるほど、そう言う訳か……。じゃあ、次の契約更新の時にそういう細かい業務内容も書き足して

契約書を作り直すとして……。それまでは総務部に来客の応対なんかをお願いしてもいいかな？」

一応、長谷川部長にはもう話をして了承も得てあるから「

「はい、いつでも声を掛けてください」

「ありがとう、助かるよ」

そう言っつて伊藤部長がデスクへと戻った直後、

社内メールが来た。

(誰かな?)

もしかして、一夜さんかと思って少しだけ期待してメールを開くと……、

.....

部長と何を話したのか知らないけど、前園さんの恋人だからって

ある事ない事告げ口するのはやめてよね。

.....

佐緒里からそんなメールが来ていた。

( ??? )

佐緒里は私が部長に何か告げ口をしたと思ったようだ。

( 告げ口のつもりじゃないんだけどなあ )

しかし、私が伊藤部長と話した内容を素直に言っても佐緒里は信じ  
てくれないだろう。

私は佐緒里からのメールには何も返さず、しばらく様子を見る事に  
した。

翌日。

-----  
今夜、食事に行きませんか？  
-----

朝一でそんな内容の社内メールが来た。  
差出人は大伴さん。

（千莉なら二つ返事でOKするのになあー）  
とりあえずそのメールは無視。

すると、



「……前園さん、単刀直入に訊きます。高本さんと付き合ってるんですか？」

とりあえず、世間話をしながら大江戸屋で食事を済ませた後、俺が煙草に火を点けたところで林田が口を開いた。

「……やっぱ、そうきたか。女子社員が来そうにない定食屋をチョイスしたから、」

そんな事を訊かれるんだろうと思ってた」

俺がそう言ったところで林田も煙草に火を点ける。

「付き合ってるよ」

「……」

俺が素直に白状すると林田は何か考えているみたいに黙り込んだ。

「じゃあ、水沢さんのご主人が部署に来た時に言ってた“真剣に付き合っている相手”って……」

「ああ、千莉の事」

林田は俺が彼女の事を“千莉”と言った事に耳をぴくりとさせた。

だが、林田はすぐに真剣な顔になった。

「……高本さんの方も真剣みたいですし、それなら、俺や他の誰かがつついたくらいじゃ何ともないとは思いますが……」

「一応、一つだけ忠告があります」

「ん？」

「大伴さんには気を付けた方がいいです。」

彼女……、昨日俺を食事に誘い出して『高本さんを誘惑してくれ』  
って言ったんです」

林田は少しだけ身を乗り出して小声で言った。

「っ」

俺はその言葉に驚きを隠せなかった。

(そんな事までして……)

「あの時、俺が『高本さんを狙ってる』なんて言ったもんだから、  
手っ取り早く俺にそう言っただけで来たんでしょう。」

もちろん、俺は『そんなのフェアじゃないから』って断りました  
けど。

でも、ぶっちゃけ高本さんを狙ってる男は大勢いますからね」

「『ボーリング大会』の人気投票もダントツだったもんなあー……」

「彼女が高本さんを狙っていそうな男性社員全員に声を掛けるとは  
思いませんけど、」

歓送迎会の時も酔ったフリをしていたみたいですからね。

前園さんが高本さんを連れて帰った後に、しれっと一人で帰って  
行きましたし」

「てか、あの時、俺が送って帰らなかったら千莉をどうするつもり  
だったんだ？」

「……確かにあの時はもう喋れないくらい潰れてましたからね。

かと言って、俺の部屋は流石にマズいですしね。

ホテルもどうかと思うし……だから正直、タクシーに乗せたもの  
の困ってました」

「そか」

「……でも、まさか高本さんがあんなに日本酒に弱いとは思わなか

つたです。

いつもそんなに飲まないし、けどあの時は珍しく途中から高本さんのピッチが早くなったから、

調子こいて『利き酒セット』をオーダーしたら……あんな事になりました」

「んー？　なんでピッチが上がったんだろ？」

「今考えてみれば高本さん、前園さんの方を気にしていたみたいですから、

大伴さんとうちの三人娘に前園さんが囲まれてたのが面白くなかったんじゃないですかね？」

「むう……でも、とにかく忠告ありがとう」

「いえ、俺はあくまで高本さんの為を思ってたんです。

それに、前園さんが『高本さんとは真剣じゃない』って答えたら忠告じゃなくて

“「宣戦布告」しているところでしたけど」

「……………」

(こいつ……やっぱり、俺、嫌いかも)

数日後、

(また来た……………)

このところ毎日のように来る大伴さんからの社内メールにうんざりしていた。

林田から忠告を受けたその日も昼休憩が終わってデスクに戻ると社内メールが来ていた。

内容は『食事に行きませんか？』

そして、今来たメールの内容は『今度のお休みに二人きりでどこかへ行きませんか？』

もちろん、俺は一々断るのも面倒臭いから無視し続けているけれど。

そして、翌日、

今夜、時間ありますか？

再び林田から呼び出された。

内容を見た瞬間、また大伴さんからだと思った俺は危うく無視するところだった。



- - - - -

はい。

でも、あんまり早過ぎると大伴さんや三人娘が乱入して来るかもし  
れないので

十九時くらいで。

- - - - -

- - - - -

OK

- - - - -

大伴さん、今度は一体何を仕掛けてきたんだろう？

午後七時半、

俺と林田は大伴さんや総務の三人娘が帰ったのを見届けてから会社のすぐ近くにある居酒屋に入った。

「さっそくだけど、大伴さんが妙な事言ってきたのは？」

オーダーした物が揃ったところで、俺は前置き無しに切り出した。

「それが今日の昼休みにいきなり呼び出されて、こんな画像を見せられたんですよ」

そう言っつて携帯の画面を俺に見せる林田。

「っ!?!?」

その携帯の画面を見た俺は絶句した。

「大伴さん曰く、前園さん、この画像に写っている女性と同棲しているって。」

だから、俺に協力しろって……そうすれば高本さんも傷付かなくて済むからって」

そう言いながら更にもう一枚画像を俺に見せる。

「……………」

俺はもう呆れて声も出なかった。

「この女性って……………」

林田は核心に触れるかのように俺の顔を窺った。

「それ…………妹だから」

「えっ!?!?」

思いもよらなかったレスなのか、林田はやや素っ頓狂な声を上げ、携帯の画像をマジマジと見た。

「一枚目は昨日、俺が帰った時にちょうど妹も帰って来てマンションの前で一緒になったんだ。」

それでその時に妹が買い物袋を持ってたから、俺が持ってやってたところ。

二枚目はその数分後に宅配が来て妹が出たところ。

だから大伴さんが言ってるように“他の女と同棲”しているんじゃないくて、“妹と同居”してるだけだから。

ちなみに千莉にも会った事があるよ」

「妹さんて大学生なんですか？」

「ああ、大学四年生。元々俺とは一緒に住む予定じゃなかったんだが……、」

まあ、いろいろ事情があって一緒に暮らしてるんだ」

「そうだったんですか。全然知らなかった」

「別に直隠しにしてた訳じゃないんだけど、特に誰にも話してなかったからなあー」

「だけど、この画像……隠し撮りっぽいですよね？」

そう言うと林田はもう一度携帯の画面を見つめた。

「昨日、尾行されてたって事か……」

「今まで耳にしてた『前園さんが夜な夜な女を部屋に連れ込んでい』ってという噂の真相がわかりました……」。

みんな妹さんの事を勘違いしてたんですね」

苦笑いの林田。

確かにそんな噂がある事は知っていたが、まさかそれを真に受けていたとは……。

翌日。

「おはようございます」

朝、私が席に座ると目の前の席に座っている林田くんが怪訝な顔でパソコンを見つめていた。

しばらくして眉間に皺を寄せたままキーボードを打ち始める。

（何かトラブルでも起きたのかな？）

だが、トラブルがあったのなら私の方にも何らかの情報が入るはずだ。

例えば手配した名刺の発注ミスや備品の手配ミス。

それにしたって、彼がこんなに険しい顔をしているのは珍しい事だけれど。

「林田くん、何かあったの？」

私で何か手伝える事があるかもしれないと思い、声を掛けてみる。

「えっ？ ああ……いや、大丈夫。仕事の事じゃないから」

すると、林田くんはすぐになんでもない顔を私に向けた。

「そう……？」

（個人的な事だったのかな？）

そして、昼休憩の直前、佐緒里から私に社内メールが届いた。

.....

添付画像を見て。

千莉、二股を掛けられているわよ？

.....

(え……?)

私はすぐに添付された二枚の画像を開いて見た。

(これは……)

画像に写っていたのは一夜さんのマンションの前、彼と彼の妹・みちるちゃんの姿だった。

ちよつど会社から帰って来たところなのか、一夜さんがお買い物をして帰って来たらしいみちるちゃんの手から

買い物袋を受け取っているところと、もう一枚は一夜さんの部屋から出て来たみちるちゃんが

玄関で宅配の荷物を受け取っているところだった。

.....

彼女は前園さんの妹さんよ。

.....

.....

そんな訳ないでしょ？

私に前園さんを取られたくないからってデタラメ言わないで

.....

.....

本当よ。

大学生の妹さんと同居しているの。

.....

.....

千莉は騙されてるのよ！

でも、私は騙されないからね！

.....

佐緒里は全然私の言う事なんて信じていないようだ。

(それにしても……どうして、佐緒里がこんな画像を持っているんだろう?)

数日後。

「ええーっ、私も前園さんと一緒にいいーっ!」

翌日の土曜日、社内行事で大きなキャンプ場を借りてバーベキュー大会が行われる事になっていた。

それで一夜さんと家の方角が同じ私が彼の車で一緒に行く事になり、佐緒里が『私も一緒に連れて行け』と

騒いでいるのだ。

「大伴さんの家は前園さんの家の方角と全然違つてでしょ？ 君は家の方角が同じ俺の車」

佐緒里を途中で拾って行く予定の林田くんが苦笑いで宥める。

「私は林田さんより、前園さんがいいっ」

佐緒里は相変わらずそんな事を言っている。

「はいはい、そんな我が俵はなしね。

「だいたい君は派遣だから今回のバーベキューも参加しないでいいんだからね？」

「う……」

言葉を詰まらせた佐緒里。

「……ごめん、言い過ぎた。参加は一人でも多い方が楽しいしね。けど、みんなで効率よく現地集合するには逆方向の人を乗せて行くよりは

同じ方角の人を乗せて行く方がいいだろ？」

「……うん」

林田くんの言葉に素直に頷く佐緒里。

（案外、この二人って合ってるのかも？）

ふと、そんな事を思った。

翌日、一夜さんが車で私のアパートまで迎えに来てくれた。

「おはよう」

今日は山の中にある大きなキャンプ場でのバーベキュー大会という事もあって、

黒のキャップに黒いポロシャツ、暗めの色のジーンズという、いつもよりラフな格好で一夜さんが現れた。

「おはよう」

かく言う私も淡いブルーのキャップに白いパーカーとブルージーンズというラフな格好をしている。

「千莉がジーンズ穿いてるトコ、初めて見たかも」

「今日は川もあるキャンプ場だってプリントに書いてあったから、この格好なら何でも出来るかな？」って「

「川釣りでもするつもり？」

「私、結構そういうの好きよ?」

「へえ? それは知らなかったな?」

「意外?」

「うん、“新たな一面を発見”って感じ」

「一夜さんはそう言っと、いつものように助手席のドアを開けてくれた。」

「そういえば、去年までは経理と総務って別フロアだったから全然顔を合わせる事もなかったよな?」

「一夜さんが車を走らせながら思い出したように笑った。」

「バーベキュー大会は毎年この時期にある。」

全部署が参加と言っても、だいたい同じフロアの部署同士で固まるから、

違うフロアにいる社員と顔を合わせる事はあまりないのだ。

「うん、去年の今頃は一夜さんの顔と名前しか知らなかった」

「でも、俺は知ってたよ？ 千莉の事」

「え……」

そんな事を言われ、驚いた。

だって……、

「俺は千莉の事、知ってた。いつも無表情で感情もまったく表に出さないって有名だった」

あの頃の私は誰とも関わりを持たずともしないで、ただただその日

その日を過ごしていた。

周りの事なんてまるで関心がなかったのだ。

だから、まさか一夜さんが当時別フロアにいる私なんかの事を知っているなんて思いもなかった。

「イブの夜、あの場所で千莉を見かけた時……一瞬“運命”を感じた……」

言いながらハンドルを切っている彼の横顔を見つめる。

「声を掛けたのも、きっと思いつきや気まぐれなんかじゃないと思う」

「……………それって？」

「“必然的”に引き寄せられたんだと思う」

「……」

私はあの時、“誰か”に声を掛けて貰うのを待っていたのかもしれない。

“もう来ない”ってわかっている相手を待っているつもりで、私を救ってくれる誰かを待っていたのかもしれない。

キャンプ場に着いて、

私は林田さんと川釣り、一夜さんはバーベキューの準備をそれぞれ始めた。

佐緒里と三人組はもちろん一夜さんと一緒だ。

今日は社員の家族も同伴していた。

私と林田くんの周りでも、川のほとりや浅瀬で別の部署の社員の子供達が遊んでいる。

男の子は川の中の魚や蟹を追いかけたり、女の子は川のほとりにある綺麗な貝や石を探している。

「あ、掛かったかも！」

釣りを始めて約十五分。

私の竿にヒットした感触があった。

「お？」

隣にいる林田くんがこちらに視線を向ける。

リールを巻いて糸を手繰り寄せると二十センチくらいのイワナが釣れた。

「絶対俺の方が先に釣り上げてやろうと思ってたのに、先越されちゃったなあー！」

フライは難しいのによく釣れたね？　もしかして、高本さん、やった事あるの？」

林田くんは言いながらイワナの口から針を外してくれた。

「ううん、全然。だから釣れたんだと思う」

「ビギナーズラックってやつ？」

「うん」

「よしっ、勝負はまだまだこれからだ！　これよりも大きいのもしくは数で勝負だっ。」

なんなら、ここにいる全員が塩焼きを食べるぐらい釣ってやる！」

妙な対抗心を燃やしながら再び自分の釣竿が置いてある位置まで戻る林田くん。

「ふふ、そんなに燃えなくても」

笑いながら再び竿を投げようとしていると、浅瀬で遊んでいた小さな男の子が

川の中にじゃぶじゃぶと入って行くのが見えた。

（あれ？）

川の中は浅いように見えて意外と深い場所もあるし、流れは緩くても苔で滑ったり、

石に躓いて転んだりしたら危ない。

（大丈夫かな？）

そして、私が気を揉んでいると……、

「あ　っ！？」

「きゃあっ!?!」

「…………千莉っ!?!」

林田と一緒に川釣りをしていた千莉の叫び声が聞こえ、彼女に視線を移すと川の中で転んでいた。

「高…………」

「千莉っ」

彼女を助けようとしている林田より素早く駆け寄って体を支えながら立たせると、

「男の子が…………」

千莉はこれまた川の中で転んでわんわん泣いている小さな男の子に視線を移した。

彼女はどうかやらこの子を助けようとして、川の中に入ったところで自分も転んでしまったようだ。

「大丈夫？」

その男の子を俺が抱き起こすと、

「あっちゃん！」

男の子の母親と思われる女性が駆け寄って来た。

「ママ……ぼうし……」

男の子は泣きながら川のと真ん中で岩に引っ掛かっている麦わら帽子を指差した。

さっき少し強い風が吹いたからその時に飛ばされたのだろう。

「あれを取りに行こうとしたの？」

母親がそう訊くと男の子はコクンと頷いた。

「危ないから俺が取りに行きます。川から上がって下さい」

川の中は流れは緩いけれど石や苔で足元が悪い。

(これじゃ千莉がコケたのもわかる気がするな)

用心しながら麦わら帽子に近付く。

すると、岩に引っ掛かっていた麦わら帽子が水流に乗って流れ始め、

「……っ」と

間一髪でそれをキャッチした。

「ありがとうございます」

俺が川から上がると母親がホッとしたように言った。

「いえ」

軽く笑みを返して男の子の目線に合わせてしゃがみ、麦わら帽子を差し出す。

「はい、今度からはちゃんと大人の人を取って貰うんだよ？ 危ないからね」

「……………」

男の子は顔を上げて妻わら帽子を小さな手で受け取った。

そして、俺に一言こつと言った。

「ありがとう、おじちゃん」

(おじ……………)

……………グサッ！

男の子言葉が胸に刺さった。

子供は時に残酷だ。

いや、実に……………。

「……どういたしまして」

引き攣る顔で笑いながら言うと男の子と母親は濡れてしまった服を着替える為にその場を離れた。

「前園さん、大丈夫ですかっ?」

その直後に大伴さんが駆け寄って来た。

「びしょ濡れじゃないですかっ。私、タオル持って来ましようか?」

「いや、ちゃんとタオルも着替えも持って来てるから。プリントに用意しとけて書いてあつたしね。」

高本さん、着替えに行こう」

これ以上大伴さんに絡まれたくない俺は千莉と一緒に車に置いていく着替えを取りに行った。

「前園さん、どうしたんですか?」

車に向かう途中、「おじちゃん」と言われた事にまだ立ち直れないでいると、

俺の隣を歩く千莉が不思議そうな顔をした。

「いやあ……あのぐらいの子にとっては俺は“おじちゃん”なんだなあー、と思ってるね」

「でも“おじいちゃん”って言われるよりはマシじゃないですか」

そう言って可愛い笑みを浮かべる千莉。

(いや、そうだけど……)

「前園さん」

千莉と一緒に再び経理部と総務部のみんなの所へ戻ると例の三人娘が一斉に駆け寄って来た。

(な、なんだっ?)

俺が足を止めると同時に千莉も足を止めた。

「前園さんと高本さんで、付き合ってるんですか?」

「……え」

「前園さん、さっき高本さんの事を“千莉”って呼んでましたよね?」

「それって一体、どういう事なんですか?」

「ただの同僚なら咄嗟だとしてもそんな呼び方なんてしないですよね?」

「ちよ……っ」

三人の勢いに圧倒される。

同時に千莉も顔を引き攣らせながら後退りしている。

「」「前園さん、答えて下さい！」「」

「俺……、「千莉」って呼んでた……？」

「」「呼んでました！」「」

「……いつ？」

「高本さんが川で転んだ時」

「高本さんに駆け寄った時」

「一回も！」

(しまった……気が動転してて気が付かなかった……)

「前園くん、本当なのか？」

経理部の伊藤部長もバーベキューの準備の手を止めた。

「いや、あのー……」

(参ったなあー……)

「前園さん、もう観念して認めちゃった方が楽になりますよ？」

そう言ってクツクツと笑いながら三人娘の後ろから近付いて来たのは林田だった。

「う……」

「高本さんはどうなんだ？」

しかも、今度は総務部の長谷川部長が千莉に訊ねた。

「……はい、お付き合い、してます」

すると、千莉は観念したように少し小さな声で答えた。

（千莉っ？）

俺は驚いて彼女の方を振り返った。

「部署内で恋愛が禁止されてるのは知ってますっ、で、でも……、  
それで、もしも、

どちらかが異動という事になるのなら……、私を異動にして下さ  
いっ」

千莉はそう言ってぺこりと頭を下げた。

「いえっ、それなら俺が異動しますっ」

「まあまあ、君達落ち着きなさい」

苦笑いしながら俺と千莉を宥める長谷川部長。

「確かに“同じ部署内”では恋愛は禁止されているが、君達は経理部と総務部だろう？」

何か問題があるかな？ 伊藤部長はどう思われます？」

「フロアは一緒と言っても別の部署だから、このままで問題ないんじゃないですかねえ？」

それに前園くんがいなくなったら困るし」

……と、伊藤部長。

「うん、うちも高本さんがいなくなるのは困るんですよねえ」

「じゃ、このまま異動なして事で」

「ですね」

そう言つて伊藤部長と長谷川部長は再びバーベキューの準備を再開した。

一瞬、『そんな簡単でいいんですか？』と突っ込みたくなつたが、それで済むならいいと思つてやめた。

「やっぱり、付き合つてたんですね……」

「相手が高本さんなら勝ち目ないなあ……」

「……あれ？ でも、いつかの女子大生は？」

そして三人組がそんな事を口にした時

「それってこの子？」

大伴さんが携帯を取り出した。

「あ……、この子だつたと思う。チラッとしか見てないけどこんな感じの子だつた」

三人組の一人・木内さんが大伴さんの携帯の画面を見ながら言った。  
他の二人もその携帯を覗き込む。

「前園さん、この女の子は誰ですか？」

「この画像を見る限り、一緒に住んでるみたいですけど？」

「高本さんと二股を掛けているんですか？」

三人組に言われ、大伴さんに携帯を見せてもらう。

すると、そこに写っていたのは俺が林田に見せられた写メと同じ物だった。

「前にも言ったけど、それ、妹だから。信じられないなら、今度連れて来ようか？」

そこまで言うと、流石に信じたらしく、大伴さんと三人組は黙り込んだ。

「だけど、どうしてこんな写メを大伴さんが持ってるの？」

「しかも、これ、隠し撮り？」

「もしかして、前園さんを尾行したの？」

だが、三人はすぐにそこに気が付いた。

相変わらずこつこついう事には鋭い。

「え……」

焦る大伴さん。

“これじゃ、まるでストーカーじゃない？”

そんな声が周りから聞こえ始める。

「……ち、違うのっ、私と佐緒里の共通の友達が一夜さんのマンシ

ヨンの近くに住んで、

それでその友達の家に行く途中に偶然、彼を見掛けて……、それで……、

佐緒里は好奇心が旺盛だから……っ」

大伴さんを庇うように慌てて千莉が口を開く。

「……その話、俺も聞いた事があるなあー」

すると、その大芝居に林田が乗った。

ハッと顔を上げる大伴さん。

千莉も驚いた表情で林田に視線を移す。

だから俺も二人の大芝居に乗っかる事にした。

「……大伴さんは、千莉の事を思ってたの事なんですよ？」

もしも、俺が本当に二股を掛けてるなら“親友として”千莉を守りたかった。

だから、この写メを撮った……違っ？」

「……………」

黙ったままの大伴さん。

「でも、心配しないで。少なくとも俺は千莉とは真剣に付き合っているから」

「……………佐緒里、心配掛けてごめんね？」

本当はそんなつもりで彼女が写メを撮った訳じゃない事は誰よりも千莉が一番よくわかっていた。

それでも大伴さんを庇っている。

それは、やっぱり“友達”だからだろう。

「……………」

申し訳なさそう顔をする大伴さん。

「てか、そんな事よりさ、釣りの続きをしようよ。」

林田が空気を変えるべく再び口を開く。

「大伴さんも釣りやってみる？」

三人組と一緒にバーベキューの準備は流石に気まぜいと思ったのか、林田が切り出した。

「う、うん」

その提案を素直に受け入れる大伴さん。

「じゃあ、高本さんと“絶賛釣り対決中”だから、俺の味方になってね？」

「えー、二対一なんてズルい！」

冗談ぽく言って大伴さんと一緒に川縁に向かって歩き始めた林田の後を慌てて追う千莉。

「千莉、負けんなよ？」

俺は千莉の背中に向かってエールを送った。

数日後、

六月の末、俺は経理部の部長・伊藤部長に呼び出された。

「大伴さんの事なんだが……」

俺がミーティングルームに入ったところで慎重な口ぶりで伊藤部長が話し始める。

「次の契約は更新しないそうだ」

「それは……どうしてですか？」

基本的にうちに入っている派遣社員は三ヶ月毎の更新だ。

五月からの契約だった冴子の代わりに大伴さんが来たから七月いっぱいまでの契約のはずだ。

それが更新しないと。。

「あの後も社員達の間で大伴さんはやはり君のストーカーだったんじゃないかって噂が広まってね。

それで居辛くなったんだと思う。次期の更新はしないと本人から申し出があったんだ」

「……」

「君を責めている訳じゃないんだ。ただ、もう派遣は入れない。それだけ言っておきたくてね」

「はぁ……」

そんな事を言われてもやっぱりそれは、俺を責めているんじゃないかと言いたくなる。

だが、それは同時に俺に“決断”を迫っているようにも思えた。

そして、翌日の七月一日。

フロアミーティングで大伴さんの後任になる向井さんが紹介された。

営業一課から急遽異動してきた女性で新婚ホヤホヤの既婚者だ。

更に数日後の金曜日の夜。

「千莉、少し飲んで帰らない？」

賢の店で一緒に食事をした後、俺はとある事を実行する為、千莉を誘った。

「……？ うん」

彼女は不思議そうな顔をしながら頷いた。

場所は最近オープンしたばかりの話題のダイニングバー。

「わぁ……すごい……」

そのVIPルームに千莉を連れて行くと天井から床まである大きな窓から見える夜景と

ライトアップされた東京タワーに彼女は目を輝かせた。

「それにしても……VIPルームって……いつの間に予約してたの

「？」

「てゆうか、ここ今すごい人気なのによく予約出来たね？」

「そこはちよいと伝を使ってね」

「実はこのダイニングバー、賢の修行時代の後輩の店なんだとか。

『たまにでいいから顔を出してやってくれ』と頼まれていたから、それならさっそく……と、

賢に裏から手を回して貰ったのだ。

カップル専用のVIPルームの中には、夜景が最大限に楽しめるよう窓の外に向かって

真っ白な皮のソファとガラステーブルが置かれていて、夜景を邪魔しない程度の間接照明が灯っていた。

「また二日酔いになるといけないから軽めのお酒にする？」

ソファに腰を下ろしながら少し意地悪に言ってみる。

「ドライマティーニにする」

すると、千莉は拗ねたように言った。

ドライマティーニはカクテルの中でもわりと強いお酒だ。

それをチョイスするとは……、

「自ら酔い潰れる事を選択するって事は、千莉が寝てる間に俺が何をしてもいいって事？」

「え……ち、違うもんっ、一夜さんが意地悪な事言うつから……」

「ははは、わかってるよ」

笑いながら千莉の頭を撫でる。

すると、彼女が少しはにかむように笑みを浮かべた。

「ジンジャーミストは？ アルコール少なめで作って貰うとか」

「うん、そうする。一夜さんは？」

「俺はギムレットにしようかな」

そして、オーダーしたギムレットとジンジャーミストが運ばれて来て、俺と千莉の目の前に置かれた。

間接照明の灯りと外の夜景がカクテルに映り込み、それを彼女が楽しそうに見つめる。

俺はそんな千莉の横顔をしばらく見つめてギムレットに口をつけた後、

「千莉……」

今夜彼女をここへ連れて来た目的を果たす為、話を切り出した。

「千莉……」

一夜さんに名前を呼ばれ、彼の方に視線を移すといつもより熱を帯びた目で私を見つめていた。

「……一夜さん？」

不思議に思いながら見つめ返すと、彼の大きな手が私の腰を力強く引き寄せた。

一気に縮まる距離。

(え……何？ どうしたの?)

「俺と結婚してくれ」

「……」

私は一瞬、何を言われたのかわからなかった。

「……………嫌？」

不安そうな顔で私を真っ直ぐに見つめる一夜さん。

(えーと……………一夜さん、今確か“俺と結婚してくれ”って……………)

「……………ええっ!?!」

今更驚く私。

「せ、千莉……………?」

その様子を見た一夜さんがポカンとする。

「い、一夜さん……………今、私に……………け、結婚……………て、言った……………?」

「うん……………て、突然過ぎて思考回路の途中で“Error”の文字が出た感じ?」

苦笑いする一夜さん。

「う、うん」

「……だよな。普通は出会った日とか付き合い始めた日とかの記念日か誕生日とか

クリスマスなんかのイベントの時に言うんだろっけど……ごめん、俺もつい焦っちゃって」

(焦る？ 一夜さんが？ 何を？ なんで？)

「今回、俺のうっかりで、みんなに俺達が付き合い合ってる事がバレちゃっただろ？」

もちろん俺は本気だし、結婚も考えてた。

けど、みちるが卒業するまではちゃんと面倒を見てやりたいし……  
…かと言って、ぼやぼやしてたら

その隙に他の男に盗られるんじゃないかと思って……結構千莉の事狙ってるヤツって多いんだよねー」

「へ？」

「それなら、今から先に“予約”だけでも入れちゃおうっかなー…  
…て」

「婚約………て事？」

「うん。来年の春、みちるが大学を卒業する。そしたら俺と結婚しよう。」

「まだ半年以上あるけど、その分ゆっくり結婚の準備が進められると思うんだ」

「私の瞳を見つめ、真剣な顔で言っ返事を待つ一夜さん。」

「はい、私の方こそ宜しくお願いします」

「私は彼のプロポーズに笑顔で応えた。」

「え、本当っ？ ホントにいいのか？」

「だって、一夜さんを狙ってる子も多いんだもん」

例えばあの三人組。

それに他にもきつと愛想が良くて優しい一夜さんに好意を持ってる子はいらと思う。

彼と付き合い始める前も社員食堂で別の部署の女の子と昼食を摂っているところや、

仕事が終わって飲みに行くところも何度か見掛けた事があった。

私と付き合い始めてからはそういう事もなくなったけれど。

「それは千莉も俺の事、他の女の子に盗られたくないって事？」

「さっし」

「盗られる訳ないだろ？ だって、俺は千莉のものなんだから」

一夜さんはそう言って優しい笑みを浮かべると私の目の前に小さな箱を置いた。

「？」

「開けてみて？」

「……うん」

その小箱を手に取り、真っ白なりボンを解いて水色のギフトボックスを開けると、

中からアイボリーのリングケースが出て来た。

(これって……)

リングケースをそつと開けてみる。

すると中には中央にダイヤモンド、その両サイドに小さめのピンクダイヤがあしらわれた

プラチナのエンゲージリングが入っていた。

「わぁ……可愛い」

「気に入ってくれた？」

「一夜さんはその指輪をそつと私の薬指にはめてくれた。」

「うん、ありがとう、一夜さん……すごく嬉しい」

私がそう言つと一夜さんが私の手を両手で包み込んだ。

そして、

「これで千莉は“予約済み”」

とても優しくキスをしてくれた。

これから長い長い人生の道のり、それを彼となら……一夜さんとなら歩いて行ける。

どんなに苦しくて辛い事があっても、きっと一夜さんとならお互いがおじいちゃん、

おばあちゃんになった時、笑って話せる。

そんな気がした。

だから、私の手をずっとずっと離さないでいてね？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7654f/>

---

本日のスープ

2011年7月7日08時28分発行